

公益社団法人日本地球惑星科学連合

平成 26 年度 第 9 回理事会

開催日時 平成 27 年 3 月 27 日（金）
9 時 30 分から 13 時 00 分

開催場所 東京大学理学部 1 号館 7 階 710 号室
（東京都文京区本郷 7-3-1）

平成 26 年度第 9 回理事会議事次第

1. 開 会

議事内容

2. 報 告 事 項

1. 委員会・セクション活動報告

1. 情報システム委員会活動報告
2. 大会運営委員会報告
3. ジャーナル編集委員会・ジャーナル企画経営委員会報告
4. グローバル戦略委員会報告
5. 総務委員会活動報告
6. 財務委員会活動報告

2. その他

3. 審 議 事 項

- 第 1 号議案 会員（正会員）入会承認の件
- 第 2 号議案 委員会委員の承認について
- 第 3 号議案 2015 年連合フェロー認定について
- 第 4 号議案 2014 年地球惑星振興西田賞受賞者について
- 第 5 号議案 法人運営基本規程第 3 条改正について
- 第 6 号議案 役員選定方法のについて
- 第 7 号議案 平成 27 年度定期社員総会 開催日程・議題・事前送付書類確認
- 第 8 号議案 議案 2017 年 JpGU - AGU Joint Meeting について
- 第 9 号議案 その他

4. 閉 会

(資 料)

報告事項

1.	委員会・セクション活動報告	
	1. 情報システム委員会活動報告	別添
	2. 大会運営委員会報告	P. 1-8
	3. ジャーナル編集委員会報告	P. 9-10
	4. グローバル戦略委員会報告	P. 11-15
	5. 総務委員会活動報告	P. 16-19
	6. 財務委員会活動報告	別添
2.	その他	

審議事項

1.	第 1 号議案 会員（正会員）入会承認の件	
	平成 27 年 2 月度 入会会員	別添
	平成 26 年度会員数推移	P. 20
2.	第 2 号議案 委員会委員承認の件	P. 21-22
3.	第 3 号議案 2015 年連合フェロー認定について	P. 23-29
4.	第 4 号議案 2014 年地球惑星振興西田賞受賞者について	P. 30-42
5.	第 5 号議案 法人運営基本規程第 3 条改正について	P. 43
6.	第 6 号議案 役員選定方法について	P. 44-50
7.	第 7 号議案 平成 27 年度定期社員総会 開催日程・議題・事前送付書類確認	P. 51-57
8.	第 8 号議案 2017 年 JpGU - AGU Joint Meeting について	P. 58
9.	第 9 号議案 その他	P. 59-62

その他の資料

	平成 26 年度第 8 回理事会議事録・	P. 63-67
	規則・	別添

2015年連合大会日程案(プログラム関連)

2014/6

カレンダー		内容
9月	1日(月)	2014年連合大会HP立ち上げ
	1日(月)	セッション提案サイト公開
10月	10日(金)	メールニュース10月号(セッション提案募集中)
	23日(木)	セッション提案最終締切
11月		セッション採択検討(プログラム委員会)
	↓	コンビーナとの調整
	上旬	プログラム編成会議 ※2014は11/11
	編成会議より 1週間程度	セッション採択最終結果取りまとめ報告(プログラム委員会へ) セッションID確定
12月	1日(月)	セッション確定
	3日(水)	セッション修正・詳細入力サイト立ち上げ
	15日(月)	セッション修正・詳細入力締切
	19日(金)	2012年大会開催全セッションweb公開
1月	8日(木)	投稿・参加登録開始
2月	3日(火)	投稿早期締切 24:00
	10日(火)	メールニュース2月号(最終投稿のお知らせ)
	18日(木)	投稿最終締切 12:00
3月	11日(水)	コマ割確定
	12日(木)	コマ割結果WEB公開
	12日(木)	プログラム編集(コンビーナ処理)
	19日(木)	コンビーナ入力締切
	24日(火)	★プログラム編成終了
	25日(水)	著者/共著者・発表者・座長へ通知(日程通知)
	30日(月)	プログラムWEB公開(PDF無)
5月	5月12日(火)	早期参加登録 登録締切 17:00
	5月14日(木)	プログラムWEB公開(PDF有)
5月24日-28日(※予備日29日)(日~木) 日本地球惑星科学連合2015年大会		

2015年連合大会 投稿採択数

		セッション数				採択数			
		採択数	合計	開催数	合計	オーラル	ポスター	オーラル合計	ポスター合計
U	国際	2	7	2	7	17	0	93	24
	通常	5		5		76	24		
O	国際	0	5	0	5	0	0	21	43
	通常	5		5		21	43		
P	国際	12	23	12	23	218	66	450	208
	通常	11		11		232	142		
A	国際	9	22	9	22	103	27	312	124
	通常	13		13		209	97		
H	国際	10	26	8	24	76	28	232	148
	通常	16		16		156	120		
S	国際	17	62	16	61	242	76	865	560
	通常	45		45		623	484		
B	国際	3	11	2	10	31	13	118	59
	通常	8		8		87	46		
G	国際	1	6	1	5	0	6	28	26
	通常	5		4		28	20		
M	国際	6	32	5	31	56	29	422	204
	通常	26		26		366	175		
小計		国際:60 通常:134	194	国際:55 通常:133	188	国際:743 通常:1798	国際:245 通常:1151	2,541	1,396
合計							3,937		

参考:過去の実績

	2014年	2013年	2012年
セッション合計	3,806	3,980	3,876
口頭発表	2,428	2,226	1,975
ポスター発表	1,378	1,754	1,901

サイエンスセッション以外の集会申込み状況

申込み者	月橋 亮	渡辺 真人	近藤 康久	高橋 知佐子
集会名称	ワイリー・ジャパン株式会社 Advancing Global Research Publications in the Geosciences: An Editor's View for Authors and Reviewers	産業技術総合研究所 ジオパークの専門員ってどんな仕事？	総合地球環境学研究所 My JpGUセミナー	株式会社フォルテ 会員向け英語セミナー
内容	Presentation about the value of peer review and manuscript preparation for international geoscience research publication. □ • Provide new and experienced peer reviewers with information about most valuable reviews;□ • Prepare authors by providing practical tips for submission to streamline the review process and how to address reviewer commentary.	全国36カ所のジオパークの多くには、専門員などと呼ばれる地球科学の専門家がいます。ジオパークにより様々な専門員の仕事の内容、待遇などを、アンケート結果を元に実際の専門員に話をし、採用を予定しているジオパークと、専門員の仕事に関心のある院生・PDの方々との、出会いとマッチングのきっかけとなる場にしたいと考えています。	JpGU会員向けサイエンス・コミュニケーション・ツール「My JpGU」(http://mypage.jpgu.org)の機能と便利使い方を説明する。My JpGUの利用促進を図ることにより、JpGU会員間の学術交流を活性化することをねらいとする。	若手研究者対象：英文抄録作成 “Tips for writing an abstract” シニア研究者対象：査読者への回答 “How to respond to reviewers” (その他の候補：効果的なカバーレターの書き方、プレゼンのQAセッションのやり方など) ※事前申し込み制とし、さらに当日参加も可とする形で運営可能 ★日本地球惑星科学連合の英語セミナーとして開催(フォルテがスポンサー)ということでご谷上と話がしていたそうです
主催者	WILEY	調整中	日本地球惑星科学連合 情報システム委員会	株式会社フォルテ(賛助会員)
代表者	月橋 亮 rtsukihi@wiley.com	斉藤清一 itoigawa_gepark@cure.ocn.ne.jp	村山泰啓 Mail: murayama@nict.go.jp	高橋 知佐子 Mail: rombun12@forte-science.co.jp
参加者概算	100	100	60	50
開催日等の希望	現時点での開催日時の第一希望は、5月25日(月曜日・大会2日目)の夕方6:00～7:00です。第二希望は5月24日(日曜日・大会初日)です。朝(7:30-8:30)開催の許可をいただけた場合は、また日時のご相談をさせていただきます。参加人数の概算も、現時点での目標値で、実際はもっと少ないかもしれません。アジェンダはAGUの編集者、日本の関連学会様の共同作業で、今後updateされる予定です。私がお慣れなため、いろいろとご面倒をおかけしております、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。 月橋			
	セッション時間中の空き部屋にて、会期中3回の開催を希望します。 (1) 5月25日(月)PM2-2 Room 102B(定員70名) (2) 5月27日(水)AM2-2 Room 103(定員160名) (3) 5月28日(木)PM2-2 Room 203(定員50名) (以上はコマ割確定前の情報に基づきます) お昼を挟んで1時間程度 開催日は相談して決めます 大会期間中2回予定、曜日未定			

2015 年大会準備報告

当日の新規入会不可について

メールニュース 3 月号（3 月 10 日）より抜粋

(2) 大会参加登録 事前申込受付中！

★事前(割引)参加登録申込締切

2015 年 5 月 12 日(火) 17:00 JST

5 月 12 日 17:00～6 月 30 日までは、新規の会員登録・身分変更等はいえませんが、必ず事前にお済ませください。

当日会場での大会会員から正会員への変更も、大会終了後の予約手続きとして承りますが、当日の参加費の会員割引は適用されません。
会員料金での参加をご希望の場合は事前に身分の変更をお願いいたします。

。「2015年大会より、発表時のスライド及びポスターは、日本語セッションであってもなるべく英語または日英併記での作成をお願いします。」
をpositiveに表す，図案化(＝小イラスト)．

- ・ 背景：

- 1) 海外からJpGUへの参加者が増えている事情に鑑み、日本語に不自由な参加者に発表内容を理解して頂くため、「2015年大会より、発表時のスライド及びポスターは、日本語セッションであっても，なるべく英語または日英併記で作成いただく事を御考慮願います．」
- 2) 一方，なぜ，日本で開催する大会で，「英語表記」が無ければいけないのか，との意見もあるが，

5

3) もともと，「海外への研究成果の海外への情報発信」をするというpositiveな発想であることを伝えるため，一目でpositiveにわかるようなロゴあるいは図案があると効果的にメッセージが伝わる．

1) 日本の電車で「携帯禁止！」表示.



- 1) フランスの電車で「携帯禁止！」は禁止と書かずに、「携帯お休み」となっている。
- 2) このようにpositiveな表現で、「学会講演において、講演画面あるいはポスター発表では日本語+英語表記にしましょう」というのを表せると皆をうまく誘導できるかと思います。



一例：動物(＝各国の人々)が、学会発表を聞いて(この図には表れていないが)、最後に理解できたので、「Wonderful talk(素晴らしい発表だ)！」と叫んで、拍手(この図では表れていない)。これにとらわれることなく、プロの視点より、これにとらわれず、図案を提案して下さるとありがたいかと存じます。

Wonderful talk!!



1. 3/27 H26 年度第 7 回編集長会議開催

投稿数は順調に伸びているが、制作部門の不具合や、1-3 月査読・編集の遅れにより、H27 年に入ってから出版論文は 4 件 (3/18)。しかし、引用件数は徐々に増加し、JGR, GRL, GEOLOGY, ACP 等の一流誌で引用され、掲載誌の平均 IF は 3.947 と高くなっている。引用促進のために H27 年度は、SNS の活用にも取り組む。

また、H27 年度新たに、CAWSES-II プロジェクトから要望のあった、PEPS で出版された論文を特集号的に書籍化するサービスに取り組む。今後、出版にかかる経費も算出していく。

2. 3/27 H26 年度第 2 回ジャーナル経営企画委員会議開催

EPS との共同出版についての意見交換を行った。EPS/PEPS の編集委員・査読者が重複する事もあり共同出版が望ましい、EPS の学会分担金や論文品質のポリシーの統一など検討課題がある等の意見が出た。EPS からは共同出版担当委員設置の提案があり、次期の科研費申請も考慮しながら、共同出版に向けての共同歩調を検討して行く。

今年度予算執行予定と来期計画について説明があり、来期は、トムソンロイターの WOS 登録申請、年間出版論文数 70 本、査読期間の短縮、有効的なプロモーションに取り組んで行きたい。

3. 2015 年度「ジャーナル関連特別シンポジウム」第 2 回募集開始 (4 月 5 日締切)

2013 年以降、特別セッションと併せて 33 名招待し、21 論文投稿 (内レビュー14 論文) の投稿があり、一定の成果が上がっているので、第 2 回の募集を実施する。

4. 第 2 期ジャーナル編集委員、ジャーナル経営企画委員 (任期: H27/4/1-H29/3/31)

基本的に第 1 期委員の継続を依頼し、編集委員長 1 名、編集委員 1 名が更新、編集委員 2 名追加。(委員リスト参照)

5. 論文投稿・出版状況 (詳細は別表参照)

・論文投稿数

～2014 年 73 (editorial-3, Correction-1, Research/Methodology-48, Review-21)

2015 年 ～16 (Research-10, Methodology-1, Review-5)

・出版論文数

～2014 年 29 (editorial-3, Correction-1, Research -18, Review-7)

2015 年 ～4 (Review-4)

・査読中 32 (Research-21, Methodology-1, Review-10)

・出版校正中 5 (Research -5)

・reject/withdrawn 済 19 件

■出版状況

	2014				2015				Total			
	Review	Resarch	Methodology	Total	Review	Resarch	Methodology	Total	Review	Resarch	Methodology	Total
1. Space and planetary sciences	2 8.0%	1 4.0%	0 0.0%	3 12.0%	1 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 25.0%	3 10.3%	1 3.4%	0 0.0%	4 13.8%
2. Atmospheric and hydrospheric sciences	2 8.0%	5 20.0%	0 0.0%	7 28.0%	1 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 25.0%	3 10.3%	5 17.2%	0 0.0%	8 27.6%
3. Human geosciences	0 0.0%	2 8.0%	0 0.0%	2 8.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 6.9%	0 0.0%	2 6.9%
4. Solid earth sciences	2 8.0%	9 36.0%	0 0.0%	11 44.0%	1 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 25.0%	3 10.3%	9 31.0%	0 0.0%	12 41.4%
5. Biogeosciences	1 4.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.0%	1 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 25.0%	2 6.9%	0 0.0%	0 0.0%	2 6.9%
6. Interdisciplinary research	0 0.0%	1 4.0%	0 0.0%	1 4.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 3.4%	0 0.0%	1 3.4%
Subtotal	7 28.0%	18 72.0%	0 0.0%	25 100%	4 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 100%	11 37.9%	18 62.1%	0 0.0%	29 100%
Editorial Correction	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	3
Total				29				4				33

■投稿状況

	～2014				2015				Total			
	Review	Resarch	Methodology	Total	Review	Resarch	Methodology	Total	Review	Resarch	Methodology	Total
1. Space and planetary sciences	8 11.6%	9 13.0%	0 0.0%	17 24.6%	2 12.5%	1 6.3%	0 0.0%	3 18.8%	10 11.8%	10 11.8%	0 0.0%	20 23.5%
2. Atmospheric and hydrospheric sciences	5 7.2%	8 11.6%	0 0.0%	13 18.8%	0 0.0%	1 6.3%	0 0.0%	1 6.3%	5 5.9%	9 10.6%	0 0.0%	14 16.5%
3. Human geosciences	1 1.4%	4 5.8%	0 0.0%	5 7.2%	0 0.0%	1 6.3%	0 0.0%	1 6.3%	1 1.2%	5 5.9%	0 0.0%	6 7.1%
4. Solid earth sciences	3 4.3%	18 26.1%	1 1.4%	22 31.9%	3 18.8%	7 43.8%	1 6.3%	11 68.8%	6 7.1%	25 29.4%	2 2.4%	33 38.8%
5. Biogeosciences	2 2.9%	3 4.3%	0 0.0%	5 7.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 2.4%	3 3.5%	0 0.0%	5 5.9%
6. Interdisciplinary research	2 2.9%	5 7.2%	0 0.0%	7 10.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 2.4%	5 5.9%	0 0.0%	7 8.2%
Subtotal	21 30.4%	47 68.1%	1 1.4%	69 100%	5 31.3%	10 62.5%	1 6.3%	16 100%	26 30.6%	57 67.1%	2 2.4%	85 100%
Editorial Correction	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	3
Total				73				16				89

■編集状況

	Review	Resarch	Methodology	Subtotal	Editorial + Correction	Total
Published	11 12.9%	18 21.2%	0 0.0%	29 34.1%	4	33
Accepted and tranferred for publication	0 0.0%	5 5.9%	0 0.0%	5 5.9%	0	5
Under review	10 11.8%	21 24.7%	1 1.2%	32 37.6%	0	32
Rejected/Withdrawn	5 5.9%	13 15.3%	1 1.2%	19 22.4%	0	19
Total	26 30.6%	57 67.1%	2 2.4%	85 100.0%	4	89

Global Strategy Com (GSC) Meeting #6

Date: 2015 Mar. 18, Wednesday 10:00-12:30

Room: Gakkai Center Building, Meeting Room, 2-4-16 Yayoi, Bunkyo-ku, Tokyo

Attendees:

Global Strategy Committee members: Gaku Kimura, (Chair), Shigeko Haruyama, Toshiyuki Hibiya, Yukio Himiyama, Kensei Kobayashi, Teruyuki Nakajima, Eiji Ohtani, Kanako Seki (Skype), Kiyoshi Suyehiro, Fumiko Tajima (Skype), Yukihiro Takahashi (Skype),

Vice president: Masato Nakamura

Secretariat: Kayoko Shirai, Yohei Sugimura

Meeting summary: ACTION ITEMS

会議概要：アクションアイテム

1. This committee (GSC) requests the Council to consider renewal of the JpGU registration system (Coordinate with Information Technology Com).
2. 25th Anniversary Symposium Abstracts from Presidents of AGU, EGU and AOGS are to be shared (Secretariat).
3. Suyehiro to organize the panel discussion session in detail.
4. Suyehiro to propose a list of addresses and draft cover letter to be sent out by mid-April.
5. Takahashi will coordinate with Publicity and Outreach Committee (Tajika Chair) for web streaming/archiving of the session. Copyright issue needs to be cleared.
6. Inform Wallis on GSC consensus on May 26 buffet party (Shirai).
7. Finalize the questionnaire at International Mixer Luncheon (Shirai to Tachibana).
8. GSC members will attend to the participants table by table (about 10 volunteer moderators required) (Shirai to Tachibana).
9. Advertise the Mixer Luncheon event (Secretariat).
10. International openness strategy discussion to be put on the agenda of GSC#7.
11. Finalize the GSC#7 meeting date between May 14-22 (Shirai).
12. Nominate a new member to GSC from mid-career members of JpGU who can provide concrete plans for the secretariat to implement (Kimura and secretariat).

Review of ACTION ITEMS from GSC #5 meeting

1. 木村理事より理事会に田島文子氏（カリフォルニア大アーヴァイン校）をグローバル戦略委員に迎えることの承認を求める。承認済。
2. 2015 年 AGU 大会のブース予算は 400 万円代とする（内グローバル戦略委員会からは 140 万円）。財務委員会。
3. 12/15 の AGU 大会中の JpGU-AGU 会議における合意に基づき、2 者間での調整を進める。2/9AGU と会合（未定）。
4. 共同声明案の最新版を委員会メンバーに送り、AGU/AOGS/EGU にも送付する。送付済。
5. 広報委員会と協議して25周年シンポジウムへの多数参加を募り、アーカイブの方策を探る。継続中：高橋。

6. 一連の国際セッションに政策担当者（例えば、文科省、NSF東京など）の招待を検討する。継続中：田島／末広。
7. 次回委員会でロードマップの議論を続けることを議題に載せる。次回以降。

Minutes of the 6th JpGU Global Strategy Committee Meeting

Kimura opened the meeting at 10:05.

Item 0: Approval of Minutes

No comments were raised to the distributed minutes of the previous meeting.

Item 1: AGU-JpGU Joint Meeting

Suyehiro reported on the meeting on February 9 at AGU Headquarters as given in the distribution (p.7).

AGU and JpGU agreed that the registration process will be handled by JpGU with AGU's assistance in identifying AGU members in the process. This necessitates a renewal or major overhaul of the current system. This committee (**GSC**) urges the Council to consider this issue (**Action Item**). Whether to keep the current bilingual mode (Japanese and English) should also be discussed.

GSC is concerned about AGU's process to keep its corporate memory of AGU Program Committee as the current Chair (D-D Rousseau (climate)) will rotate off in 2017. JpGU Program Committee Chair will be Nishiyama (Kumamoto University). Rousseau will have had experience of a joint session with EGU this year (April).

AGU has no issue over the JpGU's direction to increasing the registration fee by 50% from the present rate. JpGU secretariat estimated the increase is needed to accommodate for the space increase with the assumption of the same attendance as the Yokohama 2014 JpGU meeting. The JpGU Council needs to decide on whether it will be a one-time exceptional rate or not and also a possible raise in 2016.

Ohtani said GSC needs to continue discussing how JpGU might organize joint meetings with international partners beyond 2017 (**Consensus**).

Item 2. 25th Anniversary Symposium, "Geoscience Ahead"

Kimura suggested the order of presentations would be best if it were EGU, AOGS, and then AGU.

2-1) Speakers from 5 sections: Confirmed as selected.

2-1b) Presentation representing Science Council of Japan

Kimura commented that each of AGU, EGU and AOGS has its own unique role and cannot be stereotyped into a single model in relation to ICSU-type organization. Also important is to establish strengthen and maintain good relationship with countries in need.

Discussion was made on how best to build our relationship with other unions, in particular with AOGS. GSC members recognized the sensitivity since AOGS and JpGU have similar objectives in this part of the world, which may lead to conflicting targets. Otani suggested planning for joint sessions with AOGS should be a good target. Kimura pointed out that the current trend of increasing international sessions at JpGU is as planned (1/3 sessions and 1/4 presentations are international this year) and that JpGU should focus on cutting edge and pure science. Otani said JpGU should plan for joint sessions with EGU and AOGS in 2016 and 2017 as well.

JpGU and AGU already agreed that the 2017 meeting will be referred to as JpGU-AGU Joint Meeting. This does not preclude joint sessions with other unions.

2-2) Draft Joint Communiqué: Distributed but no response yet.

Abstracts from Presidents of AGU, EGU and AOGS are to be shared (**Action Item**).

2-3) Panel discussion

Suyehiro to be the moderator of the panel discussion (**Consensus**). Besides the union presidents' positions, voices from the floor should be solicited particularly from future leaders age group. The discussion should lead to the adoption of the joint communiqué. **Action Item:** Suyehiro to organize the panel discussion session.

2-4) Attracting audience to the 25th anniversary session

Kimura said we should aim for 200 to participate. JpGU representatives (~100) are to be requested to attend.

Flyer is ready for distribution. E-mail also needs to be utilized. Currently including HTML in e-mail is not encouraged due to security reasons. Each Section will also advertise the session through their channels.

Tajima proposed to pursue invitation of relevant science policy makers at NSF (U.S. National Science Foundation, Tokyo Office and DFG (German Research Foundation) and others such as at MEXT. She explained the importance of extending JpGU arms to these organizations. International coordination at science union level will need support of relevant funding agencies. Appropriate invitation letters to the session and reception should be written and sent by normal mail. Emphasis on scientific vision and its societal relevance need to be spelt out well. Suyehiro to propose a list of addresses and draft cover letter to be sent out by mid-April (**Action Item**).

Tajima pointed out that the US Embassy might be interested in holding a symposium or workshop in 2016/2017.

Suggestions were made on what to include in the cover letter.

Hibiya shared his concern about JpGU relationship with AOGS as we move along the internationally open direction.

Takahashi expressed the importance of involving deans and presidents of Asian universities as their societal prestige is very high.

Takahashi will coordinate with Outreach Committee (Tajika Chair) for web streaming/archiving of the session. Copyright issue needs to be cleared (**Action Item**).

2-5) Buffet party (Wallis in charge)

Changes suggested by GSC members are as follows (**Action Item to Wallis**):

Moderator will be Simon Wallis.

Masato Nakamura welcomes participants and introduces guests.

Carol Finn, Günter Blöschl and Kenji Satake will have chance to speak to the attendants.

Japanese “TAIKO” performance to be made before the reception leading the participants into the reception room (15 minutes). This avoids the drum sound to interfere with parallel business meetings nearby.

Drinks will be served without protocol.

Hodaka Kawahata closes the reception.

2-6) International Mixer Luncheon (Tachibana in charge)

The questionnaire at International Mixer Luncheon needs to be finalized (**Action Item (Shirai to Tachibana)**).

JpGU President to address the attendees (currently about 50 responded; invitations up to 120).

GSC members will attend to the participants table by table (about 10 volunteer moderators required) (**Action Item (Shirai to Tachibana)**).

Secretariat to advertise the Luncheon event (**Action Item**).

2-7) Welcome *dinner* (Seki in charge)

Seki asked for requests from GSC. The main purpose of the dinner event is for the 2 Union sessions (U-01 and U-02) participants to get acquainted with each other and to go over issues, if any, for the success of the sessions the next day in an informal atmosphere. No screen and projector requested.

It was decided that this event will be buffet style and invite up to 40 people including appropriate Science Council of Japan members (Earth and Planets: Okubo Shuhei, Himiyama Yukio, Fujii Ryoichi, Takahashi Keiko). Invitations are to be extended to JpGU Section Presidents and GSC members

As a result of this discussion, this event should be announced as “reception.”

Item 3: NASA-JAXA outreach event for junior high school students

Shirai explained the status. It is on track with Fujimoto’s involvement.

Item 4: Proposal from Wallis on recommendations for AGU Fellows and Honors

As Wallis was absent and in view of the fact that the next deadlines for recommendations to AGU will be 3/15 and 4/15 of 2016, GSC will consider this item in the future meeting. Nakamura suggested GSC work with the Award Committee before going to the Council. Suyehiro said he became a member of the AGU Honors and Recognition Committee and confirmed the AGU direction towards fair recognition of geoscientists worldwide.

Item 5: 日本学術会議の新たな展望を考える有識者会議 (Experts meeting)

organized by the Cabinet Ministry) (第 5 回) (1/22)

Kimura reported on the meeting (draft minutes distributed by e-mail) as he explained to the experts on the role of JpGU and its relationship to the Science Council of Japan.

Item 6: Enhancing international openness with roadmap

Discussion skipped. To be discussed in the early part of the next meeting (**Action Item**).

Item 7: Next meeting

Next meeting date will be finalized between May 14-22 (**Action Item**).

Item 8: Other business

Secretariat proposed to add a new member to GSC who can represent mid-career members of JpGU who can provide concrete plans for the secretariat to implement. Kimura will direct GSC to select a person (**Action Item**).

GSC also recognized the importance of strengthening the secretariat, which may require expansion and reorganization.

Item 9: Adjournment

GSC #6 was adjourned at 12:30.

平成26年度 共催・協賛・後援等一覧

2015/3/26 18:39

承認日	種別	会合名等	開催期間	会場
3月16日	協賛	計算工学会講演会	2015年 6月 8日(月)～ 10日(水)	つくば国際会議場
申請中	後援	科学教育研究協議会・第62回全国研究大会・大阪大会	2015年8月8日(土)～ 2015年8月10日(月)	近畿大学
申請中	後援	われわれはどこに住めばよいのか?～地図を作り、読み、災害から身を守る～	2015年6月20日(土) 13時～17時00分	日本学術会議講堂

公益社団法人 日本地球惑星科学連合
会長 様

平成 年 月 日

委員会活動参加承諾書

下記の通り、以下の学生が日本地球惑星科学連合の委員会活動に参加することを承諾いたします。

指導教員名：_____

参加委員会名：

学生氏名：

所属：

学年：

代議員選挙規則

(趣旨)

第1条 この規則は、法人運営基本規程により、理事会において定めるものとされている代議員選挙に関する事項について定めるものとする。

(細則への委任)

第2条 代議員選挙に関する事項は、この規則によるほか、代議員選挙実施細則の定めるところによる。

(立候補等)

第3条 被選挙権を有する正会員は、立候補届出期間内に立候補届出書を選挙管理委員会に提出して、候補者となることができる。

2 被選挙権を有する正会員は、その者の承諾の下に、選挙権を有する1名以上の正会員が、立候補届出期間内に、推薦届出書を選挙管理委員会に提出することによって、候補者となる。

(候補の辞退)

第4条 候補者となった者は、投票開始日の前日から起算して7日前までに、候補者辞退届を選挙管理委員会に提出して、候補者を辞退することができる。

(投票の方法)

第5条 投票は、候補者リストの中から適任者5名以内の者を選び、これを連記する方法により行なう。

(選挙の実施時期)

第6条 代議員選挙の実施時期は、法人運営基本規程第12条2項の規定に基づき、理事会が決定する。

(選挙公示)

第7条 選挙管理委員会は、第6条の実施時期の決定に基づき選挙公示を行う。

(選挙結果の報告)

第8条 選挙管理委員会は、選挙結果を社員総会及び正会員に報告する。

附則

この規則は、この法人の設立の登記の日に遡って施行するものとする。

法人運営基本規程（抜粋）

（各登録区分において選挙すべき代議員の数）

第7条 各登録区分において選挙すべき代議員の数（以下「配分代議員数」）は、前条において定める代議員の定数から30名を控除した人数を、選挙公示日の前日における各登録区分における正会員の数によって比例配分し、これに5を加算した数として算出する。但し、配分代議員数として算出された数のうち小数点以下の端数については、配分代議員数の合計が代議員の定数と一致するまで、端数の大きい順に切り上げて算出して処理するものとする。

<2015年3月時点の登録区分別正会員人数に基づく定数算出>

2015年3月20日現在	(人)	
登録区分別正会員人数		
宇宙惑星科学	1,319	15.33%
大気水圏科学	1,809	21.02%
地球人間圏科学	1,056	12.27%
固体地球科学	3,090	35.91%
地球生命科学	596	6.93%
地球惑星科学総合	736	8.55%
合計	8,606	

◆定数算出

団体会員数＝50

次期代議員数(団体会員数*2)＝100

100-30*区分別比率		整数+5	定数	(切り上げ順位)
宇宙惑星科学	10.72	15	16	3
大気水圏科学	14.71	19	20	4
地球人間圏科学	8.58	13	13	5
固体地球科学	25.13	30	30	6
地球生命科学	4.841	9	10	2
地球惑星科学総合	5.98	10	11	1
	70	96	100	

平成26年度会員数推移

正会員							准会員							大会会員						
	入会	変更(+)	退会(-)	喪失(-)	削除(-)	現会員数	入会	変更(-)	退会(-)	喪失(-)	削除(-)	現会員数	入会	退会(-)	削除(-)	変更(-)	現会員数			
3月末						7540						392					665			
4月	294	65	7	4	9	7879	32	33	2		1	388	89		9	32	713			
5月	53	1	2	36	9	7886	8	0	0	0	0	396	0	1	16	1	695			
6月	5	0	2	0	1	7888	7	0	0	0	0	403	1	0	1	0	695			
7月	8	1	2	0	0	7895	1	1	1	0	0	402	0	0	0	0	695			
8月	9	1	3	0	1	7901	1	0	0	0	0	403	0	0	288	1	406			
9月	8	0	4	0	0	7905	2	0	0	0	0	405	5	0	0	0	411			
10月	13	0	2	0	0	7916	1	0	0	0	0	406	6	1	0	0	416			
11月	2	0	1	0	1	7916	3	0	0	0	0	409	0	0	0	0	416			
12月	7	0	1	0	0	7922	1	0	0	0	0	410	2	0	0	0	418			
1月	134	10	5	0	7	8054	22	9	1	0	68	354	53	0	1	1	469			
2月	580	31	11	0	27	8627	79	24	0	0	2	407	242	0	10	7	694			
3月						8627						407					694			
	1113	109	40	40	55		157	67	4	0	71		398	2	325	42				

正会員

2015/2/28

8627 名

准会員

407 名

大会会員

694 名

変更
大会会員より正会員へ
准会員から正会員へ

団体会員			賛助会員			
入会	退会	現会員数	入会	退会	現会員数	
3月末		49			1	
4月	1	50			1	
5月		50			1	
6月		50			1	
7月		50			1	
8月		50			1	
9月		50			1	
10月		50	1		2	
11月		50			2	
12月		50			2	
1月		50			2	
2月		50			2	
3月						
	1	0	50	1	0	2

全会員
8597 名
8980 名
8977 名
8986 名
8992 名
8710 名
8721 名
8738 名
8741 名
8750 名
8877 名
9728 名
名

3月末
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月

審議事項:委員会委員承認の件

グローバル戦略委員会

選出母体	氏名	所属
-	三宅弘恵	東京大学地震研究所

ジャーナル企画経営委員会

選出母体	氏名	所属
	川幡穂高	東京大学大気海洋研究所
	津田敏隆	京都大学生存圏研究所
	木村学	東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
	中村正人	宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所
	田近英一	東京大学大学院新領域創成科学研究科
地球生命科学	井龍康文	東北大学大学院理学研究科地学専攻
固体地球科学	吉岡祥一	神戸大学 自然科学系先端融合研究環・都市安全研究センター
大気水圏科学	佐藤正樹	東京大学大気海洋研究所
大気水圏科学	多田隆治	東京大学大学院理学系研究科
地球人間圏科学	松本淳	首都大学東京大学院都市環境科学研究科
宇宙惑星科学	倉本 圭	北海道大学大学院理学院宇宙理学専攻
拡大委員会		
EPS	小田啓邦	産業技術総合研究所地質情報研究部門
EPSオブザーバー	西 弘嗣	東北大学学術資源研究公開センター
EPSオブザーバー	杉田 倫明	筑波大学生命環境系
セクションプレジデント	佐々木 晶	大阪大学大学院理学研究科
セクションプレジデント	中島映至	東京大学大気海洋研究所
セクションプレジデント	氷見山幸夫	北海道教育大学教育学部
セクションプレジデント	大谷栄治	東北大学大学院理学研究科
セクションプレジデント	小林 憲正	横浜国立大学大学院工学研究院
外部有識者	林和弘	

ジャーナル編集委員会

General Chief Editor	Affiliation	Section
井龍康文	東北大学大学院理学研究科地学専攻	5. Biogeoscience
Section Editors	Affiliation	
倉本 圭	北海道大学大学院理学院宇宙物理学専攻	1. Space and planetary sciences
佐藤正樹	東京大学大気海洋研究所	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
松本淳	首都大学東京大学院都市環境科学研究科	3. Human geosciences
小原一成	東京大学地震研究所	4. Solid earth sciences
吉岡祥一	神戸大学自然科学系先端融合研究環・都市安全	4. Solid earth sciences
川幡穂高	東京大学大気海洋研究所	5. Biogeoscience
多田隆治	東京大学大学院理学系研究科	6. Interdisciplinary sciences
Name	Affiliation	Section
大竹真紀子	宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部	1. Space and planetary sciences
長妻 努	情報通信研究機構	1. Space and planetary sciences
山本 衛	京都大学 生存圏研究所	1. Space and planetary sciences
池原 研	産業技術総合研究所地質情報研究部門	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
井上源喜	大妻女子大学社会情報学部	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
大手信人	京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
金谷有剛	海洋研究開発機構地球環境変動領域	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
児玉裕二	国立極地研究所	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
杉田 文	千葉商科大学	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
芳村 圭	東京大学大気海洋研究所	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
早坂 忠裕	東北大学大気海洋変動観測研究センター	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
日比谷紀之	東京大学大学院理学系研究科	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
菊地 俊夫	首都大学東京都市環境科学研究所	3. Human geosciences
近藤昭彦	千葉大学環境リモートセンシング研究センター	3. Human geosciences
岡本耕平	名古屋大学大学院環境学研究科地理学講座	3. Human geosciences
千木良雅弘	京都大学防災研究所	3. Human geosciences
村山 祐司	筑波大学大学院生命環境科学研究科	3. Human geosciences
大谷栄治	東北大学大学院理学研究科地学専攻	4. Solid earth sciences
加藤照之	東京大学地震研究所	4. Solid earth sciences
川勝均	東京大学地震研究所	4. Solid earth sciences
サイモン・ウォリス	名古屋大学大学院環境学研究科	4. Solid earth sciences
渋谷和雄	国立極地研究所	4. Solid earth sciences
清水久芳	東京大学地震研究所	4. Solid earth sciences
中田節也	東京大学地震研究所	4. Solid earth sciences
平島崇男	京都大学大学院理学研究科	4. Solid earth sciences
三ヶ田 均	京都大学	4. Solid earth sciences
宮内崇裕	千葉大学大学院理学研究科	4. Solid earth sciences
渡辺 寧	秋田大学 国際資源学部	4. Solid earth sciences
遠藤 一佳	東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻	5. Biogeoscience
小林憲正	横浜国立大学大学院工学研究院	5. Biogeoscience
中川 毅	立命館大学 古気候学研究センター	6. Interdisciplinary sciences
岡崎裕典	九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門	6. Interdisciplinary sciences

海外在住編集

Lin-Ni Hau	Institute of Space Science, Department of Phys	1. Space and planetary sciences
Noriko Kita	Department of Geoscience, University of Wisc	1. Space and planetary sciences
Patrick Michel	Observatoire de la Cote D'Azur, France	1. Space and planetary sciences
William M. Irvine	Department of Astronomy, University of Mass	1. Space and planetary sciences
John P. Burrows	Institute of Environmental Physics and Remote	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
Kevin Hamilton	Department of Meteorology and International P	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
Mark Green	Center for the Environment, Plymouth State Un	2. Atmospheric and hydrospheric sciences
Eduardo de Mulder	Earth Science Matters Foundation	3. Human geosciences
Junko Habu	Anthropology Department, University of Calif	3. Human geosciences
Mike Meadows	Department of Environmental & Geographical S	3. Human geosciences
Nigel Tapper	School of Geography and Environmental Scien	3. Human geosciences
R.B.Singh	Department of Geography, University of Delhi,	3. Human geosciences
Bjorn Mysen	Geophysical Laboratory, Carnegie Institute of V	4. Solid earth sciences
Colin J.N. Wilson	School of Geography, Environment and Earth S	4. Solid earth sciences
Craig R. Bina	Dept. of Earth and Planetary Sciences, Weinbe	4. Solid earth sciences
Dave Rubie	Bayerisches Geoinstitut, University of Bayreuth	4. Solid earth sciences
Fenglin Niu	Department of Earth Science, Rice University	4. Solid earth sciences
J. Casey Moore	University of California, Santa Cruz, USA	4. Solid earth sciences
James B. Gill	Environmental Studies Department, University	4. Solid earth sciences
Mike Coffin	University of Tasmania, Australia	4. Solid earth sciences
Paul Tackley	Department of Earth Sciences, ETH Zurich Inst	4. Solid earth sciences
Peter Van Keken	Department of Earth and Environmental Scienc	4. Solid earth sciences
Shun-ichiro Karato	Department of Geology & Geophysics, Yale Un	4. Solid earth sciences
Toshiro Tanimoto	Department of Earth Science, University of Cali	4. Solid earth sciences
Heiko Palike	Ocean and Earth Science, National Oceanogra	5. Biogeoscience
Joseph Kirschvink	California Technology University, USA	5. Biogeoscience
Andrew Henderson	Physical Geography, Newcastle University	6. Interdisciplinary sciences

2015 年連合フェロー認定について

氏 名：秋元 肇

所 属：日本環境衛生センター、アジア大気汚染研究センター 所長

受賞理由：

大気化学，特に光化学大気汚染機構，対流圏オゾンの空間分布とその変動，ならびに，地球規模大気汚染とその気候への影響の研究における顕著な貢献により

For outstanding contributions to atmospheric chemistry, in particular to the understanding atmospheric chemical processes and impact of global air pollution on climate and the environment

主な業績：

秋元肇氏は，（１）光化学オゾンの生成機構の解明，不均一反応による亜硝酸生成の重要性の指摘，植物起源有機化合物の大気化学反応によるエアロゾル生成機構の解明，大気化学反応で重要な活性化学種の検出，（２）北半球の対流圏オゾン分布に対する３地域（北米，ヨーロッパ，東アジア）からの汚染物質排出の寄与の見積もり，東アジア縁辺域のオゾン分布に対する長距離輸送の影響評価，対流圏化学過程を組み込んだ化学気候モデルの構築，（３）社会・経済データに基づくアジア地域でのオゾン前駆物質等の排出量の見積もり，アジア地域における農業起源汚染物質の排出インベントリーの整備，アジア地域における人為起源汚染物質の排出インベントリーの整備，（４）国内外における大気化学・大気汚染研究プログラムの立ち上げとその推進，などに顕著な貢献をされた。

氏 名：石田 瑞穂

所 属：産業技術総合研究所、活断層・火山研究部門客員研究員

受賞理由：

地震学，特に関東東海地域直下のフィリピン海プレート構造の解明，および広帯域地震観測の推進に対する顕著な貢献により

For outstanding contributions to the understanding of the structure of Philippine Sea plate beneath the Kanto-Tokai area and to the development of the nation-wide broadband seismic network

主な業績：

石田瑞穂氏は，３枚のプレートが複雑に沈み込む関東東海地域において，地震の震源分布，メカニズム解，及び，地震波速度構造のデータを詳細に分析し，いずれのデータにも矛盾がないフィリピン海プレートの構造モデルを提唱した．このプレートモデルは，この地域のテクトニクスを理解するにとどまらず，広く，理学，工学の分野で活用されている．石田氏はまた，広帯域地震観測網の整備に尽力した．1990年代当初，日本国内には，広帯域地震観測点は数える程しかなかったが，氏の尽力により観測点は飛躍的に増大した．特に，オープンデータポリシーに基づき世界中の研究者が利用しやすいようなフォーマットでデータを提供したことは画期的であり，グローバルな地震研究の活性化に多大な貢献をした．

氏 名：伊藤 英司

所 属：岡山大学名誉教授、岡山大学地球物質科学研究センター客員研究員

受賞理由：

高压地球科学，特にマルチアンビル高压実験による地球深部科学分野への顕著な貢献により

For outstanding contributions to high pressure geophysics, in particular to the study of the Earth's deep interior via high pressure experiments with multi-anvil apparatus

主な業績：

伊藤英司氏は、マルチアンビル高压実験のパイオニアである。地球深部の物質科学研究で世界をリードし、我が国のみならず米国や欧州における高压地球科学の研究拠点形成にも大きく貢献した。研究面で代表的な業績は、(1) ブリジマナイト（珪酸塩ペロブスカイト）の合成と物性測定、(2) 各種マントル鉱物の融解実験・元素分配実験、(3) 焼結ダイヤモンドアンビルによる～1Mbar 圧力発生等である。

氏 名：太田 陽子

所 属：横浜国立大学名誉教授、国立台湾大学特聘講座教授

受賞理由：

第四紀学と地形学，特に環太平洋地域の地殻変動と海面変動を地形から復元した顕著な貢献により

For outstanding contributions to quaternary science and geomorphology, in particular to the geomorphological reconstruction of tectonic processes and sea level changes in the Circum-Pacific region.

主な業績：

太田陽子氏は、日本列島の海岸段丘の編年と形成以降の地殻変動による変形を各地で明らかにした。その過程で確立した研究手法をニュージーランド、パプアニューギニア、チリ、台湾などの地殻変動が活発な地域において適用し、第四紀の地殻変動と海面変動の特徴と地域性について国際レベルでの知見をもたらした。活断層トレンチ調査から活断層の活動歴および変異と累積性、地震災害との関係性を解明した。

氏 名：大家 寛

所 属：東北大学理学研究科客員研究者、東北大学名誉教授、福井工業大学名誉教授

受賞理由：

宇宙空間プラズマ物理学，特に飛翔体観測や地上観測の推進と理論研究面からの顕著な貢献により

For outstanding contributions to the space plasma physics, in particular to the extensive space-based and ground-based observations together with theoretical works

主な業績：

大家寛氏は、飛翔体観測や地上観測と理論面から宇宙空間プラズマ物理学を開拓し、歴史に残る研究を行って来た。ロケット、人工衛星、惑星探査体等の飛翔体を用いた研究では、インピーダンスプローブ、プラズマ波動観測器、そしてプラズマサウンダー・レーダサウンダーの開発を行い、電離層、磁気圏、惑星間空間からハレー彗星、月へと新領域開拓の研究を実施した。地上から宇宙を探索する研究では3点の観測局を拓き、干渉計測を中心に、木星電波放射の実体の究明と放射メカニズムの解明を始め、木星電波放射機構のモデルを提唱した。デカメータ波での宇宙電波観測の視点を、銀河の中心に存在すると予想されはじめたブラックホールへと向け、パルス電波の確認など新しい研究成果を得た。太陽系起源の理論では、原始太陽から流失する多量のガスの中での密度波の形成が巨大惑星の起源であることを提唱した。

氏 名：兼岡 一郎

所 属：東京大学地震研究所 名誉教授

受賞理由：

地球化学，特にアルゴンを用いた地球年代学，および希ガスをを用いたマンタルの物質的構造の理解への顕著な貢献により

For outstanding contributions to geochemistry, in particular to the development and application of K-Ar and Ar-Ar dating to geological samples, and to the understanding of mantle chemical structure using noble gases

主な業績：

兼岡一郎氏は、希ガスをを用いた年代学及びマンタル地球化学を常に先導してきた研究者である。年代学に関しては、アルゴン-アルゴン年代測定法の黎明期に主として海外の大学においてその手法の開発に大きな貢献をされた。帰国後も数多くの火山岩や南極隕石の年代測定に取り組み、特に日本海盆玄武岩の年代測定はその後の島弧形成論に多大な影響を与えた。さらに希ガス同位体を用いたマンタル研究の分野を開拓し、その一例としてハワイ諸島の火山岩が高いヘリウム同位体比を持つことを初めて示された。その後も様々な場に噴出する火山岩の希ガス同位体の分析を通じてマンタルの化学的構造とその進化の研究を主導し、特にマンタル二層対流モデルと全対流モデルの議論に多くの問題提起をされた。

氏 名：上出 洋介

所 属：名古屋大学名誉教授

受賞理由：

太陽地球系物理学，特に太陽-磁気圏-電離圏相互作用，磁気嵐，サブストームをテーマとする革新的研究による顕著な貢献により

For outstanding contributions to the solar-terrestrial physics, in particular to the innovative studies of the solar wind-magnetosphere-ionosphere interaction, magnetic storms, and substorms.

主な業績：

上出洋介氏は太陽風-磁気圏-電離圏相互作用，磁気嵐，サブストームの分野において学界を先導する研究を行った。特に，KRM 法として知られる地球磁場データ逆計算法を提唱し，それを用いた「サブストーム時のオーロラジェット電流」の研究は特筆すべき成果である。また，「磁気嵐-サブストームの関係」の新提唱，「磁気嵐主相の 2 段階発達」の発見など数多くの業績をあげた。更に，多数の著作によって研究成果の国際的な発信と交流に大きな寄与をした。また，アジア／大洋州地球科学学会の設立に多大な貢献をした。

氏 名：國分 征

所 属：東京大学名誉教授、名古屋大学名誉教授

受賞理由：

磁気圏ダイナミクス・波動研究，特に衛星搭載磁力計開発，極地観測，地磁気データ解析等の多様な手法による分野への顕著な貢献により

For outstanding contributions to magnetospheric dynamics, in particular to excellent various works in magnetometer development onboard spacecraft, Antarctic observations, and data analysis of geomagnetic observations

主な業績：

国分征氏は，極域電離圏には 2 つの渦を持った電流系が常に存在し，惑星間磁場（IMF）の南向き成分の変化とともに消長し，IMF の変化が 1 時間程度以上続く場合には，サブストームの発達につながることを示した。また，磁気嵐は数時間以上続く IMF 南向き成分の変化に対応し，地球が太陽プラズマ雲に包まれても，IMF が北向きの場合には発達しないことを初めて指摘した。サブストーム成長期から拡大期への発達は，自然発生的なものか，外部トリガーによるかは，必ずしも明らかにされていないが，成長期的変動が見られる場合には太陽風不連続性によりトリガーされることを明らかにした。ULF 波動 Pc について，偏波の日変化，共役性などの基礎的な特性を，地磁気データ解析から初めて明らかにし，OGO5 や静止衛星データにより磁力線共鳴振動であること検証した。太陽風による磁気圏圧縮による VLF・ULF 波動の励起に関する先駆的な研究も行った。

氏 名：平 朝彦

所 属：海洋研究開発機構 理事長

受賞理由：

地質学，特に付加体概念の構築と展開，日本列島形成論の提案，および国際的な海洋掘削科学への顕著な貢献により

For outstanding contributions to geology, in particular to the establishment and development of the accretionary prism concept, the understanding of the formation of Japanese islands, and the global ocean drilling science

主な業績：

平朝彦氏は、(1) 乱泥流の組織構造を磁性応答から研究する手法，光散乱から測定する手法などを用いて堆積物理学の構築に貢献した。(2) プレート境界に沿う四万十帯と南海トラフ沿いの前弧堆積体の海洋地質研究から，付加体モデルを構築し，砂泥堆積物の年代順序と深海性泥岩-チャート-玄武岩溶岩と時代順序との位相関係の明晰証明をおこなった。(3) ODP そして IODP の国際共同研究を主導し，掘削コアの堆積記録の総合研究，古海洋環境変動についての解析，巨大ファン堆積物の解析，様々な地域の付加体解析から，大陸地域における地殻形成過程を理論化した。(4) 本州弧と伊豆マリアナ島弧地殻の地殻探査構造を，地質構造，物理探査結果，深海掘削，堆積物の残留磁気，粒子特性，有機物組成変動，炭質物評価などから，衝突体の形成過程を明らかにした。

氏 名：茂木 清夫

所 属：東京大学名誉教授

受賞理由：

火山物理学，岩石破壊力学及びそれに基づいた地震物理学における顕著な貢献により

For outstanding contributions to physical volcanology, rock mechanics, and earthquake physics

主な業績：

茂木清夫氏は，永年にわたって，火山物理学，岩石破壊力学及びそれに基づいた地震物理学研究に携わり，それぞれの分野で大きな成果を挙げた。1950 年代に発表した，火山噴火と地殻変動の関係についての「茂木モデル」は，世界中の火山学者にあまねく知られ，噴火機構解明のための基礎理論となっている。1960 年代に，岩石破壊実験を精力的に実施し，アコースティック・エミッション (AE) を通じて，岩石の巨視的破壊に先行する微小破壊過程で顕著な業績をあげた。その著書は AE 研究の古典的文献とされている。また，岩石破壊実験の真の 3 軸加圧試験機を開発して，これまで不明であった中間主応力の効果を明らかにした。地震物理学に関しては，地震群の分類とその解釈，前震，余震の特性，地震空白域，地震活動の移動，浅い大地震と深発地震の関係，地震活動期など，数々の先見的アイデアを提唱または発展させてきた。

氏 名：八木 健彦

所 属：東京大学名誉教授、愛媛大学客員教授

受賞理由：

鉱物物理学，特に量子ビーム高圧地球科学分野への顕著な貢献により

For outstanding contributions to mineral physics, in particular to high-pressure earth science with quantum beams

主な業績：

八木健彦氏は、1982年に始まる我が国の大型放射光施設における高圧地球科学研究において先駆的・指導的な役割を果たされ、現在では地球下部マントルの最重要鉱物として知られるブリッジマナイト（斜方晶ケイ酸塩ペロフスカイト）の構造と物性を、世界に先駆けて解明された。さらに、シリカ、鉄、水素、水、希ガス、そして、それらの混合系など、多岐に亘る地球惑星深部物質の超高压高温下における振る舞いを解明された。最近では、パルス中性子施設における高圧ビームライン PLANET の建設に尽力された。相補的な情報の得られる放射光 X 線とパルス中性子線の活用により、「量子ビーム高圧地球科学」は、今後、更に飛躍的に発展するものと期待される。八木氏は、世界を先導する我が国の高圧地球科学分野の発展の基礎を築かれた。

氏 名：安成 哲三

所 属：人間文化研究機構総合地球環境学研究所 所長

受賞理由：

気象学および気候学，特にアジアモンスーンの形成と変動の理解，および国際的学際的な地球環境学推進への顕著な貢献により

For outstanding contributions to meteorology and climatology, in particular to understanding to the formation and variability of Asian monsoon, and to promotion of international and interdisciplinary studies on global environmental changes

主な業績：

安成哲三氏は、アジアモンスーンに約 40 日周期の季節内変動があることを発見し、その変動が熱帯気象にはたす役割を解明した。モンスーンの年々変動が赤道太平洋でのエルニーニョ・南方振動（ENSO）に能動的に作用することを明らかにし ENSO がモンスーン変動に影響しているという従来の視方を覆した。ユーラシア大陸の積雪変動がアジアモンスーン変動に与える影響や植生が気候形成に果たす能動的役割についても、従来の説を大きく覆す研究結果を出した。これらの仮説の検証も含めて、アジアモンスーン域のエネルギー・水循環に関する国際的観測計画 GAME を立ち上げ、大きな成果を上げた。

氏 名：吉野 正敏

所 属：筑波大学名誉教授

受賞理由：

気候学，特に小気候学，モンスーン気候学，環境気候学，および地球環境科学，地理学における顕著な貢献により

For outstanding contributions to climatology, in particular to local-scale climatology, Monsoon climatology, environmental climatology, and global environmental science and geography

主な業績：

吉野正敏氏は，小気候学の研究，特に風の局地性を地形との関係で解明した．モンスーンに関連して梅雨期間の 4 段階を東アジアにおける梅雨前線・収束帯の動きとの関連で解明した．モンスーンアジアにおける乾季・雨季の変動と稲作について関係性を明らかにした．日本を中心とした東アジアの天気図型の分類を行い，各型の季節変化・年々変動を明らかにした．旧ユーゴスラビア，スリランカ，ジャワ，海南島，タクラマカン砂漠などの地域ごとの局地気候と人間の活動との関係性について明らかにした．

日本地球惑星科学連合 2014 年度地球惑星科学振興西田賞審査委員会審査経緯

2014/11/25 第1回委員会 13 : 30-15 : 00

2014/12/15 応募締め切り

2014/12/29 第2回委員会 15 : 00-17 : 00

2015/ 1/26 第3回委員会 14 : 00-18 : 00

2015/ 2/23 第4回委員会 14 : 00-18 : 00

委員会：近藤 豊委員長、廣瀬 敬副委員長、大村 善治委員、永原 裕子委員、高薮 縁委員、吉田 尚委員、佐竹 健治委員、鍵 裕之委員、川勝 均委員、川本 竜彦委員、佐野 有司委員、福田 洋一委員、磯崎 行雄 委員

委員会事務局：中村 正人顕彰制度担当理事、成瀬 元顕彰制度担当理事、杉村 洋平事務局員

今回の理事会では、審査の過程と審査結果を報告し、最終候補者の承認を御願いたい。

なお、委員会では振興西田賞のあり方についても大いに議論がたたかわされ、理事会に対する提言も挙げられたが、時間の都合上今回の理事会での説明は避け、審査結果のみを報告する。提言は次回以降の理事会で紹介する。

第1回委員会

振興西田賞の概要説明、委員長、副委員長の互選、日程調整を行った。第2回委員会までに各候補者の論文に関する情報（主要論文などの引用件数など）を調べるように委員会から事務局に要請があった

第2回委員会

31名の応募があった事が報告された。審査に当たっての評価の基準として本賞の規則第2条にある「新しい発想によって優れた研究成果を挙げ、国際的に評価を得ている者」という条文に基づき、学問における功績のみに基づいて審査を行うこと、またその際新しい発想という点について特に重視することを確認した。

各候補者について、主著論文数、共著論文数、それぞれ単年度当たりの論文数、および主要5論文の引用数が記された基礎資料が示された。第一次審査として基礎資料を元に各候補者について精査した結果、19名の候補者を第二次審査の対象とした。

二次審査の対象となった候補者を研究分野によって分野別グループに分け、対応する審査委員が担当し精査することとした。第3回審査委員会以前に以下の4分野での予備会議を行い、その結果を持ち寄って全体での審査を行うこととし、分野毎の予備会議では各候補者の優れた点を挙げ、400字程度にまとめたものを次回委員会資料とする事にした。分野を跨がる候補者は2つ以上の予備会議で議論するこ

ともあり得るものとした。

各分野：宇宙惑星物質関連

宇宙惑星プラズマ、大気

大気水圏

固体地球

また審査委員の分野毎の人数と、応募者の分野毎の人数が比例していたかったため、予備会議では必要な分野についてアドバイザーを依頼する事とした。

第3回委員会

各分野の結果が報告され、各候補者について詳細な議論がなされた。議論を踏まえての第2次選考を行い14名を残すこととした。

第4回委員会までに各委員が14名の順位をつけ、それを事務局がメールにより取りまとめて委員会に示す事になった。

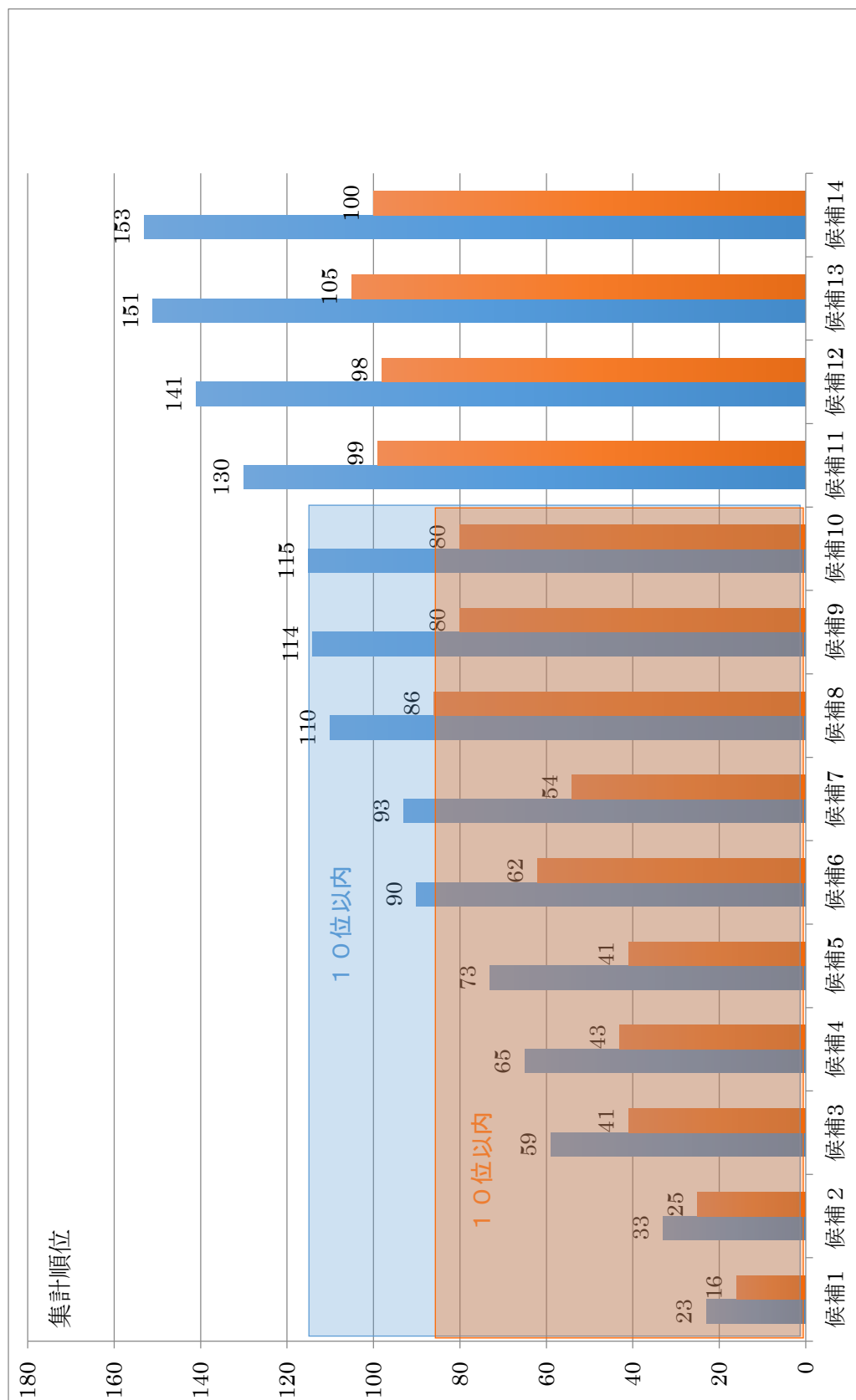
第4回委員会

集計の結果は次ページ以降であり、委員全員の集計（青い棒グラフ）でみても、第2回委員会出席委員だけの集計（橙の棒グラフ）でみても、10位と11位の間にギャップがみられる。11-14位の候補者について改めて議論したが、順位を逆転させるだけの理由は見当たらなかったため、1-10位の候補者を最終選考者として決定した。

本日の理事会で了承が得られれば、午後連合のHPにて氏名と研究題目（日本語および英語）を発表する。

以上事務局

氏名	順位	集計	第2 回出 席者 による 順位	左記集計	審査員 1	審査員 2	審査員 3	審査員 4	審査員 5	審査員 6	審査員 7	審査員 8	審査員 9	審査員 10	審査員 11	審査員 12	審査員 13	審査員 14
候補1	1	23	1	16	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
候補2	2	33	2	25	2	5	2	4	3	5	3	2	2	2	1	1	1	1
候補3	3	59	3	41	7	8	3	4	4	4	6	3	3	4	3	8	2	2
候補4	4	65	5	43	5	2	6	1	7	6	8	4	6	7	5	3	5	5
候補5	5	73	4	41	12	6	4	1	2	2	4	5	4	3	9	10	11	11
候補6	6	90	7	62	8	4	11	7	5	12	10	7	10	5	4	4	3	3
候補7	7	93	6	54	14	3	5	4	9	3	9	6	5	10	6	9	10	10
候補8	8	110	10	86	3	10	10	12	12	10	2	12	11	8	7	6	7	7
候補9	9	114	8	80	4	13	9	7	11	11	14	10	8	6	10	5	6	6
候補10	10	115	9	80	11	7	14	11	13	9	5	11	7	9	8	2	8	8
候補11	11	130	12	99	6	11	7	7	10	13	7	9	13	11	13	14	9	9
候補12	12	141	11	98	9	14	8	12	8	8	13	8	9	12	14	13	13	13
候補13	13	151	14	105	10	12	12	12	6	14	11	13	12	13	12	12	12	12
候補14	14	153	13	100	13	9	13	7	14	7	12	14	14	14	11	11	14	14



		宇宙惑星科学	大気水圏科学	地球人間科学	固体地球科学	地球生命圏科学
相川 祐理	「分子雲から原始惑星系円盤形成にいたる化学進化の統合的理論モデルの研究」	○				
河北 秀世	「彗星の分光学的観測による太陽系起源の研究」	○				
是永 淳	「マントル対流の進化とプレートテクトニクスの開始に関する研究」				○	
鈴木 建	「太陽コロナ加熱および太陽風加速の理論モデル構築とシミュレーションによる研究」	○				
竹村 俊彦	「全球エアロゾルモデルの構築と気候変動に対するエアロゾルの影響の研究」		○	○		
長谷川 洋	「革新的衛星観測解析手法による磁気圏ダイナミクスの研究」	○				
三好 健正	「局所アンサンブル変換カルマンフィルタによる数値データ同化手法の高度化の研究」		○			
三好 由純	「衛星観測データに基づく放射線帯電子フラックス変動の研究」	○				
Andre Revil	「多孔質媒質中の流体力学・電磁気学的現象の理論とその地球科学への応用に関する研究」				○	○
渡部 雅浩	「気候モデルの開発とそれによる気候変動メカニズムの研究」		○	○		

受賞理由

相川 祐理

「分子雲から原始惑星系円盤形成にいたる化学進化の統合的理論モデルの研究」

Integrated study on the chemical evolution from molecular clouds to protoplanetary disks

相川氏は、分子雲収縮から原始惑星系円盤進化における軽元素の化学進化を、中心星および他の星からの輻射に着目した時間発展問題として理論的に考察し新しい領域を開拓した。円盤の2次元構造とその物理進化、輻射によりイオン化した分子、さらには同位体を含む固体表面および気相における非平衡反応ネットワークを統合的に解くことで、分子種の分布の空間的・時間的发展が定量的に示された。結果は、単純な熱化学反応により予測されるものとは大きく異なり、特に外側の低温領域において巨大有機分子がダストに固定され、COやメタノールなどの主要分子種が減少するなど、観測事実を見事に説明した。一連の研究は当該分野の研究のスタンダードになったばかりでなく、稼働を始めた国際協同アルマ望遠鏡による観測の指針、および観測結果の解釈に絶大な貢献をなしており、きわめて高い国際的評価を受けている。

河北 秀世

「彗星の分光学的観測による太陽系起源の研究」

Spectroscopic observations of comets and their implications to the origin of the solar system

河北氏は太陽系に現存するもっとも始源的な天体である彗星の分光学的観測から、太陽系の起源解明につながる研究を展開した。彗星に含まれる氷の成分のうち特にアンモニアに着目し、その原子核スピン異性体の比率からアンモニア分子が形成された温度環境を推定する手法を開発し、彗星が生まれた位置が推定可能であることを示した。原子核スピン異性体比の研究対象を彗星氷の主成分であるH₂OやCH₄にも広げており、この分野を先導する研究者である。近赤外領域における高分解能分光観測から彗星中のCH₄、HCN、CH₃OHなどの高揮発性有機分子を検出し、さらには赤外線観測衛星“あかり”を用いた彗星中のCO₂のサーベイ観測を展開している。分光学的な観測から、彗星に含まれる分子中の¹⁵N/¹⁴N、D/Hなどの同位体比を測定し、候補者が開拓した原子核スピン異性体と比較することからも彗星の起源を明らかにしようとしている。

是永 淳

「マントル対流の進化とプレートテクトニクスの開始に関する研究」

Studies on the evolution of mantle convection and the initiation of plate tectonics

是永氏は、マントル対流の理論的研究を行い、地球の熱史に関して新理論を提案した。すなわち「高温のマントルほどリソスフェアが厚くなるため低速で対流する」ことを提案し、新しい統計手法を用いて地球物理学と地球化学の観測事実を精査し、以前には互いに矛盾していると考えられた基本的問題を次々に解明した。加えて、海底観測を計画実施し、独自に開発した手法を用いて逆問題を解きモデル構築を行っている。プレートテクトニクスの起源と進化に関する一連の仕事をまとめた論文をも発表している。

鈴木 建

「太陽コロナ加熱および太陽風加速の理論モデル構築とシミュレーションによる研究」

Theory and simulations of coronal heating and solar wind acceleration

鈴木氏は長年メカニズムが判らなかった太陽コロナ加熱・太陽風加速を説明する理論モデルを提唱し、コロナ加熱・太陽風加速が、表面对流層による磁束管足下の擾乱の自然の帰結であることを磁気流体力学シミュレーションで示した。そこでは、太陽表面における対流運動を起源として発生したアルフヴェン波の非線形散逸を取り扱っているが、そのために十数桁におよぶ密度勾配を持つ系における波動伝搬を解くことができる高精度衝撃波捕獲磁気流体数値計算コードを独創的に開発した。これにより磁気流体波動の伝搬・反射・減衰・加熱を首尾一貫した方法で扱うことが初めて可能となった。現在の太陽コロナ・太陽風に対する結果を原始星段階の太陽風や降着円盤風にも拡張しているが、これらの結果は太陽系進化の解明にも寄与しうるなど波及効果も大きい。

竹村 俊彦

「全球エアロゾルモデルの構築と気候変動に対するエアロゾルの影響の研究」

Development of global aerosol models and their applications to the studies of the effects of aerosols on climate

エアロゾルは、汚染物質である他、気候変動にも関わるため、その定量的な評価・予測の鍵となる要素の1つでもある。エアロゾルはその化学組成や表面物性が多様で、その気候モデルへの組み込みは容易ではなかった。竹村氏は早い時期からこの問題に取組み、我が国で開発している全球大気海洋結合モデル MIROC に、エアロゾル関連過程を組み込み、SPRINTARS と呼ばれる全球エアロゾル輸送・気候モデルを開発した。その後モデルを精緻化し、全球雲解像モデル NICAM にも結合し、高分解能の全球解析を可能とした。また、硫酸塩と前駆物質、黒色炭素、土壌ダスト、海塩、硝酸塩のほか、重要な二次有機エアロゾルと前駆気体を取り扱える改良を続けている。これらを通して、エアロゾルの気候変動に対する定量的影響評価および、エアロゾル週間予測システムの開発と運用、氷期・間氷期スケールの気候変動における土壌ダストの役割解明などの古気候研究、福島第一原発事故による放射性物質の長距離輸送解析など重要な応用を行ってきている。

長谷川 洋

「革新的衛星観測解析手法による磁気圏ダイナミクスの研究」

Understanding of magnetospheric dynamics based on advanced techniques for the analysis of spacecraft observations

長谷川氏は欧州が打ち上げたクラスター衛星 4 機による編隊観測と三次元電磁流体シミュレーションとの比較により、太陽風磁場が北向きの時に、磁気圏側面境界で大規模ケルビン-ヘルムホルツ不安定によって渦が巻き上がった状態にまで発達していること、および渦中でプラズマが混合して太陽風プラズマが磁気圏プラズマと共存していることを示し、太陽風から磁気圏へのプラズマ・エネルギー流入メカニズムの同定に成功した。プラズマ・磁場の一点観測から衛星軌道周辺の磁場の二次元像を再現するデータ解析手法—Grad-Shafranov Reconstruction (GSR) 法を、複数衛星の観測データを利用して時間発展も考えられるモデルに発展させた。改良した GSR 法により、複数のポイントを伴う非定常磁気リコネクションによって磁気フラックスロープが形成されることを示し、この磁場構造が磁気圏前面での太陽風エネルギー流入を抑制するという新しいモデルを提唱した。長谷川氏の一連の論文は多く引用され、GSR 法も広く使われて国際的にきわめて高い評価を得ている。

三好 建正

「局所アンサンブル変換カルマンフィルタによる数値データ同化手法の高度化の研究」

Studies on advanced data assimilation for improving numerical weather prediction using the local ensemble transform Kalman filter.

データ同化は、シミュレーションと実測データを融合する統計数理の一分野で、天気予報の精度を左右する重要な役割を果たす。三好氏は、局所アンサンブル変換カルマンフィルタ LETKF という大規模シミュレーションに適した高度な手法を用い、世界で初めてスーパーコンピュータ「京」を使って世界最大規模の全球大気アンサンブルデータ同化に成功するなど、最先端の研究を進めている。LETKF コードは三好氏自身が独自に開発、そこで使われている適応型バイアス補正法や適応型分散膨張法などの新規技術により、実際の数値天気予報への応用に耐える世界でも有数のシステムとなった。最新の開発コードは公開され、日本、アメリカ、ブラジル、アルゼンチン、ドイツなど様々な国で、現業数値予報システム開発現場や、大学や研究機関での研究・教育に幅広く利用されている。

三好 由純

「衛星観測データに基づく放射線帯電子フラックス変動の研究」

Studies on variations of electron fluxes in the radiation belts based on spacecraft observations

三好氏は人工衛星のデータ解析と数値シミュレーションの組み合わせに基づく包括的な研究を進め、プラズマ波動による非断熱加速過程が放射線帯外帯の相対論的電子加速に有効に働いていることを明らかにした。この研究から「エネルギー階層間結合」という概念を打ち出したが、この考え方は内部磁気圏や放射線帯の変動現象を理解する際のキーとなるコンセプトとなっている。第 23 太陽活動周期の-100 nT 以下のすべての磁気嵐を CME（コロナ質量放出）起源、CIR（共回転相互作用領域）起源に分類しながら、磁気嵐時の放射線帯外帯の応答を調べ、静止軌道等に近しい外帯のフラックス増加に有効に働くのは CIR 起源の磁気嵐であり、CME 起源の磁気嵐はスロット領域の増加に効果的であることを初めて明らかにした。また、プラズマ波動粒子相互作用の観測的・理論的研究から、プロトン・オーロラ現象に関わるプラズマ波動と高エネルギー粒子の降込みモデルについて観測的な検証を行った。

Andre Revil

「多孔質媒質中の流体力学・電磁気学的現象の理論とその地球科学への応用に関する研究」

Theoretical studies on coupled hydromechanical and electromagnetic phenomena in porous media and their applications to the geosciences.

Revil 氏は、不飽和多孔質媒質中での流体力学・電磁気学的相互作用のモデリング手法の開発、誘電分極の新しいモデリング手法による多孔質媒質中の浸透率分布の推定など、既存の枠に捕らわれない発想で理論的研究を進め、これらの分野で革新的な成果を挙げている。また理論的研究のみならず、数値実験や室内実験によるモデルの検証などでも卓越した成果を挙げるとともに、これらの手法を生かし、石油・ガスなどの地下資源開発に関連したボアホール探査、地熱貯留層や火山活動モニタリング、水資源や地下水汚染監視などの環境問題の研究に取り組むなど、応用面においても多くの成果を挙げている。さらには生物地球物理分野での biogeobattery に関する研究など、新たな学問領域の開拓にも意欲的である。

渡部 雅浩

「気候モデルの開発とそれによる気候変動メカニズムの研究」

Development of climate models and their applications to the studies on climate variability

渡部氏は、大気の長期変化傾向を理解し今後の気候変動を予測するために、複雑な非線型過程をすべて含むそれまでの大気大循環モデルに対して、世界で初めて湿潤過程を含んだ線型大気モデルを独自に構築した。このユニークな線型大気モデルを駆使した数値実験により、大気長周期変動モードの成り立ちや、長周期変動と気候平均場、総観規模擾乱群、あるいは海洋との相互作用について、それらのメカニズムに踏み込んだ多くの先駆的成果をあげている。最近では“気候変動に関する政府間パネル (IPCC)” 評価レポートにも資する大循環モデルの構築を精力的に主導し、近年のいわゆる温暖化の停滞問題についても新規性の高い数値実験を通してこの問題に終止符を打つ成果を得ている。また、作成した数値モデルは広く研究コミュニティに用いられ、気候力学分野の研究を一層発展させることにも貢献した。

地球惑星科学振興西田賞規則

2014 年 4 月 28 日 理事会制定

(趣旨)

第 1 条 この規則は、公益社団法人日本地球惑星科学連合（以下、「連合」という。）が「地球惑星科学振興西田賞」により、地球惑星科学の分野において国際的に高い評価を得ている優れた中堅研究者を表彰する為に必要な事項を定めるものである。本賞の名称は西田篤弘会員のご提案と寄付金により本賞を維持することに由来する。

(受賞者の要件)

第 2 条 受賞者は、次の各号に該当するものとする。

- (1) 審査年度の 4 月 1 日時点において 45 歳未満である者。
- (2) 地球惑星科学の分野において新しい発想によって優れた研究成果を挙げ、国際的に高い評価を得ている者。

2 原則として個人とするが、授賞 1 件につき 2 名までの連名を認める場合がある。

(選考・受賞者数)

第 3 条 受賞者の選考は隔年で行ない、選考毎に 10 件以内を選ぶ。

2 受賞者数は、連合の各セクションから 1 件以上とし、配分においてはセクションの規模を考慮する。

(推薦)

第 4 条 選考対象は他薦または自薦による候補者とする。候補者は会員・非会員を問わない。他薦の場合、正会員のみが推薦者となることができる。他薦の場合は推薦者 1 名が、自薦の場合は本人が、以下の内容が記載された推薦書類（任意書式）をもって会長に推薦するものとする。

〔推薦書類の構成〕

- (1) 候補者の名前、連絡先（所属機関、住所、電話番号、メールアドレスなど）
- (2) 候補者の経歴、受賞歴
- (3) 査読付き論文リストおよび主要な論文 5 編の別刷り
- (4) 推薦理由書（A 4 で 6 ページ以内、日本語あるいは英語）
自薦の場合は本人が、他薦の場合は推薦者が作成する。
- (5) 2 通のサポートレター（自薦の場合は本人以外の 2 名、他薦の場合は推薦者以外の 2 名が、日本語あるいは英語により作成する。いずれの場合もサポートレターを作成する 2 名については会員・非会員を問わない。）

- (6)他薦の場合は推薦者の氏名と連絡先（住所、電話番号、メールアドレスなど）
- 2 推薦書類の MS Word ファイルとその PDF を日本地球惑星科学振興西田賞事務局にメールにて送付する事とする。
- 3 推薦者は、本人に授賞の意志があることを事前に確認しなければならない。

（審査委員会）

- 第 5 条 理事会は、地球惑星科学振興西田賞審査委員会（以下、「審査委員会」という。）を設置し、推薦された候補者の中から受賞者を選考する。
- 2 審査委員会に関する規則は別に定める。

（授与）

- 第 6 条 理事会は、審査委員会からの選考結果を受け、受賞者を認定する。
- 2 会長は表彰式において受賞者に賞状を授与する。
- 3 副賞として受賞者に 1 件あたり 50 万円を贈る。原資は地球惑星科学振興西田賞特別会計とする。

（推薦・審査の実施時期）

- 第 7 条 候補者の推薦及び審査の時期は理事会が定める日程をもって行う。

（規定の改廃）

- 第 8 条 この規定の改廃は、理事会の決議を必要とする。

附則

- (1)この規則は、2014 年 4 月 28 日から施行する。
- (2)本賞の授賞は 2014 年度から開始し、以降、隔年（西暦の偶数年度）にて行う。
- (3)本賞の授賞式は選考年度の翌年に行う。

2014 年 4 月 28 日 理事会制定
2014 年 6 月 2 日 理事会改正
2014 年 12 月 8 日 理事会改正

地球惑星科学振興西田賞審査委員会設置規則

2014 年 4 月 28 日 理事会制定

（趣旨）

第 1 条 この細則は、地球惑星科学振興西田賞規則に基づき、地球惑星科学振興西田賞審査委員会（以下、「審査委員会」と言う。）に関し必要な事項を定めるものとする。

（任務）

第 2 条 審査委員会は、理事会の要請に基づき、地球惑星科学振興西田賞被推薦者の中から受賞者を選考する。

（委員会の組織）

第 3 条 委員は、各セクションから当該分野の現状に通じた経験豊かな正会員を一名以上複数名選出するものとする。委員会全体で 15 名程度とし、その構成比率はセクションの規模を考慮して決める。

2. 委員は理事会の議を経て会長が委嘱する。

3. 委員長は互選とし、理事会の議を経て会長が指名する。

（委員会の運営）

第 4 条 委員長は、必要があると認めるときは委員会を招集し、その議長となる。

2. 委員会の決議は、委員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。可否同数のときは議長の採決するところによる。

3. 前項の場合において、議長は委員として評決に加わることはできない。

（委員の任期）

第 5 条 委員の任期は審査年度の 10 月から 3 月までとし、再任は最初の審査開始から最大 4 年までとする。

（委員名の公表）

第 6 条 委員名は、受賞者が決定した時点でこれを公表する。

（委員の制約）

第 7 条 被推薦者および推薦者は委員になることはできない。

（秘守義務）

第 8 条 委員は、被推薦者および推薦者に関する情報を委員会の外に出してはならない。

附則

（1）この規則は、2014 年 4 月 28 日から施行する。

理事会審議事項：法人運営基本規程第3条改正について

法人運営基本規程

■現行

(入会基準)

第3条 正会員、団体会員又は賛助会員として入会を認める基準は次のとおりとし、理事会が別に定める方法をもって、申し込むものとする。

(1) 正会員：地球惑星科学に関わる又は関心を持つ個人で、この法人の目的及び事業に賛同し、入会を希望する者

(2) 団体会員：地球惑星科学に関わる活動実績を有する学術研究団体で、この法人の目的及び事業に賛同し、入会を希望する団体

(3) 賛助会員：この法人の事業を援助する個人又は団体

2 この法人は、地球惑星科学の教育及び普及のため、大学学部学生及びこれに准ずる者並びにそれより年少のものであって、地球惑星科学に関わる又は関心を持つ個人で、この法人の目的及び事業に賛同し入会を希望するものを、会費の納入義務のない准会員として募ることができる。

■改正案

(入会基準)

第3条 正会員、団体会員又は賛助会員として入会を認める基準は次のとおりとし、理事会が別に定める方法をもって、申し込むものとする。

(1) 正会員：地球惑星科学に関わる又は関心を持つ個人で、この法人の目的及び事業に賛同し、入会を希望する者

(2) 団体会員：団体会員：80名以上の正会員による地球惑星科学に関わる活動実績を有する「日本学術会議協力学術研究団体」に登録された学術研究団体、またはこれに準ずる学術研究団体で、この法人の目的及び事業に賛同し、入会を希望する団体

(3) 賛助会員：この法人の事業を援助する個人又は団体

2 この法人は、地球惑星科学の教育及び普及のため、大学学部学生及びこれに准ずる者並びにそれより年少のものであって、地球惑星科学に関わる又は関心を持つ個人で、この法人の目的及び事業に賛同し入会を希望するものを、会費の納入義務のない准会員として募ることができる。

定款 抜粋

第3章 役員

(役員設置)

第15条 この法人に、次の役員を置く。

理事 15名以上 20名以内

監事 3名以内

2 理事のうち、1名を代表理事とする。

2 代表理事以外の理事のうち 8名以内を業務執行理事とすることができる。

(役員選任)

第16条 理事及び監事は、社員総会の決議によって選任する。

2 代表理事及び業務執行理事は、理事会の決議によって理事の中から選定する。

3 前項で選任された代表理事は、当然に会長に就任する。

4 理事会は、その決議によって、第 2 項で選任された業務執行理事より副会長、専務理事及び常務理事を選定することができる。この場合、副会長は 3 名以内、専務理事は 1 名、常務理事は 5 名以内とする。

法人運営基本規程 抜粋

第4章 役員選任

(役員選任)

第14条 理事及び監事は、役員候補者推薦委員会が提出する定員以上の候補者名簿等の資料を参考として、社員総会の決議によって各々選任する。

2 役員候補者推薦委員会の設置、任務、組織、運営、委員の選任・任期その他の必要事項については、理事会の決議により別に定めるものとする。

選挙管理委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、定款及び法人運営基本規程に基づき、選挙管理委員会に関し必要な事項を定めるものとする

(任務)

第2条 選挙管理委員会は、代議員選挙及び各セクションの代表者(セクション プレジデント)の選挙および役員の選定について理事会の決議により選挙によるものとした場合の役員選挙など、この法人において実施される選挙について管理する。

2 選挙管理委員会は、選挙の結果を適宜の方法により、正会員及び社員並びに 社員総会及び理事会に報告する。

(委員会の組織)

第3条 選挙管理委員会は役員および代議員を除く正会員の中から理事会が 推薦し、会長が委嘱する 6 名の委員により構成する。

2 委員長は委員の互選によって選任され、委員会を代表する。

(委員会の運営)

第4条 委員長は、必要があると認めるときは、委員会を招集し、その議長となる。

2 選挙管理委員会の決議は、委員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

可否同数のときは議長の採決するところによる。

3 前項の場合において、議長は、委員として表決に加わることはできない。

(委員の任期)

第5条 委員の任期は 1 年とし、再任をさまたげない。

(委員長の任期)

第6条 委員長の任期は、委員の任期による。

(委員の制約)

第7条 委員は、候補者および推薦者になることはできない。

附則

本規則は、法人設立時に遡って施行する。

役員選挙規則

(趣旨)

第1条 この規則は、理事会の決議により役員を選定が選挙によるものとされた場合に実施される役員選挙に関する事項について定めるものとする。

(細則への委任)

第2条 役員選挙に関する事項は、この規則によるほか、役員選挙細則の定めるところによる。

(選挙権及び被選挙権)

第3条 選挙公示日の前日において代議員である者は、役員選挙の選挙権ならびに被選挙権を有する。但し、選挙の最終日まで代議員としての資格を喪失した場合には、この限りではない。

(選挙の方法)

第4条 選挙は投票により行う。
2 投票は、代理人によって行うことができない。

(投票の方法)

第5条 投票は、直接連記無記名により行うものとする。

(役員選挙の種類と実施時期)

第6条 役員選挙は、定期選挙と補欠選挙とする。
2 定期選挙の投票は社員総会において行う。
3 第2項のほか、定期選挙の実施時期は理事会が定める日程をもって行う。

(立候補等)

第7条 被選挙権を有する正会員は、立候補届出期間内に立候補届出書を選挙管理委員会に提出して、候補者となることができる。
2 被選挙権を有する正会員は、2名以上の代議員が、立候補届出期間内に推薦届出書を選挙管理委員会に提出することによって、候補者となることができる。

(候補の辞退)

第8条 候補者となった者は、投票日の前日から起算して7日前までに、候補者辞退届を選挙管理委員会に提出して、候補者を辞退することができる。

(選挙公示)

第9条 選挙管理委員会は、第6条第3項の実施時期の決定に基づき選挙公示を行う。

(選挙結果の報告)

第10条 選挙管理委員会は、選挙結果を正会員及び社員総会に報告する。

附則

この規則は、この法人の設立の登記の日に遡って施行するものとする。

役員選挙実施細則

(趣旨)

第1条 この細則は、本法人役員選挙規則に基づき、役員選挙の実施に関する事項を定めるものとする。

(立候補届出書)

第2条 立候補届出書には次の事項を記載する。

- (1) 候補者の氏名
- (2) 候補者の生年月日
- (3) 候補者の所属機関
- (4) 候補者の所属登録区分
- (5) 候補者の所信 100字以内

(推薦届出書)

第3条 推薦届出書には次の事項を記載する。

- (1) 候補者の氏名
- (2) 候補者の生年月日
- (3) 候補者の所属機関
- (4) 候補者の所属登録区分
- (5) 推薦者（選挙権を有する代議員2名以上）の氏名
- (6) 候補者が推薦を承諾した旨を明示するもの
- (7) 立候補者の所信（推薦者が作成した推薦文）100字以内

(候補者名簿)

第4条 選挙管理委員会は、投票日の前日から起算して14日前までに、候補者名簿を作成し、本会ホームページに掲載する。

2 候補者名簿には次の事項を記載する。

- (1) 候補者の氏名
- (2) 候補者の所属機関
- (3) 候補者の所属登録区分
- (4) 立候補者の所信（他薦の場合にあつては、筆頭推薦者名を添えた推薦文）100字以内

(投票無効)

第5条 次に掲げる投票は、無効とする。

- (1) 所定の投票用紙を用いないもの
- (2) 候補者でない者の氏名を記載したもの
- (3) 所定の人数以上の候補者の氏名を記載したもの
- (4) 職業、身分、住所又は敬称以外の事項を記載したもの

(5)被投票者を確認できないもの

(当選者の決定)

第6条 得票の多い者から順次定員に満つるまでを当選者とし、得票が同数の場合は、年齢の若い者より当選者を定める。

2 当選者が当選の日から任期開始後60日までの間に、死亡、退会若しくは正当の事由により辞退又は辞任したときは、次点の者を繰上げ当選者とする。

3 役員候補者の数がその定員を超えないときは、投票を行わず、投票期間経過と同時に、その候補者を当選者とする。ただし、当選者が定員に満たないときは、補欠選挙を行う。

附則

この細則は、この法人の設立の登記の日に遡って施行するものとする。

役員候補者推薦委員会規則

(目的)

第1条 この規則は、本法人の法人運営基本規程に基づき役員候補者推薦委員会の設置に関し必要な事項を定め、かつその運営の円滑化を図ることを目的とする。

(設置及び任務)

第2条 この法人は、前条の目的を達成するため、役員候補者推薦委員会（以下「推薦委員会」という。）を設置する。

2 推薦委員会は、この法人の理事、監事（以下「役員」という。）の候補者を選出し、社員総会に提出することを任務とする。

(構成)

第3条 推薦委員会は、会長及び社員9名で構成する。

2 推薦委員会の議長は、会長が就任する。

3 推薦委員会の会長を除く他の委員は、社員総会において選任する。

4 委員の選任にあたってはすべてのセクションから1名以上の社員を選任しなければならない。

5 前項の選任に当たり、会長は、理事会に対しその候補の提出を依頼できる。

6 理事会は、会長から前項の要請があった場合は、その候補者の名簿を提供しなければならない。

(招集及び開催)

第4条 推薦委員会は、会長が、役員を選任を行う社員総会の開催に先立ち招集し、開催する。

(選出方法)

第5条 推薦委員会の決議は、推薦委員会委員の3分の2以上の出席をもって行う。

2 推薦委員会は、役員候補者をそれぞれ審議して、多数決により、それぞれの選出必要人数以上の候補者を選定する。

3 前項の選定に当たり、会長は、理事会に対しその候補の提出を依頼できる。

(情報提供)

第6条 理事会は推薦委員会における前条の審議に当たり、会長の要請があった場合は選出する役員候補者の経歴、推薦理由、この法人の他の役員との関係、その他の役員候補者に関する情報を提供しなければならない。

(候補者名簿及び議事録)

第7条 推薦委員会は議事終了後速やかに候補者名簿及び議事録を作成し、議長及び出席

した推薦委員会委員が議事録に記名押印し、その候補者名簿と議事録を社員総会に提出しなければならない。

(任期)

第8条 推薦委員会の委員の任期は、その社員としての任期と同一とし、再任を妨げない。
2 推薦委員会の委員は、辞任又は任期満了後においても、第3条第1項に定める定員に足りなくなるときは、新たに選任された者が就任するまでは、その職務を行わなければならない。

(報酬)

第9条 推薦委員会の委員は、無報酬とする。
2 推薦委員会の委員には、その職務を行うために要する費用の支払をすることができる。

附則

この規則は、平成22年5月26日より施行する。ただし、会長は、第4条に基づき推薦委員会を招集する時点において第3条第3項に基づき選任された委員がいない場合には、同条第5項及び第6項に基づいて提出された候補者名簿の社員をもって委員として委嘱して、推薦委員会を招集し開催することができるものとする。これにより委嘱された委員の任期は、選任後初めて開催される社員総会の終結の時までとする。

平成23年12月22日 一部改正（平成24年5月23日追認）

平成 27 年 4 月 1 日

社員各位

公益社団法人日本地球惑星科学連合
会長 津田 敏隆

定時社員総会招集ご通知

拝啓 時下ますますご隆盛のこととお慶び申し上げます

さて、当法人平成 27 年度定時社員総会を下記により開催いたしますので、ご出席くださいますようお願い申し上げます。

お手数ですが、会場準備の都合上、同封の出欠回答書を平成 27 年 4 月 30 日（木）までに必着で事務局あてへ「同封の返信用封筒」で郵送下さるようお願い申し上げます。

ご出席の方

「定時社員総会出欠回答書」にご記入の上、平成 27 年 4 月 30 日（木）までに必着で郵送にてお送りください。また、直前のご予定変更など緊急の場合に備え、念のため「委任状」をご提示いただけますと幸いです。ご協力の程お願い致します。

代議員の方でご欠席の方

別紙「委任状」に住所、氏名をご記入、押印の上、平成 27 年 4 月 30 日（木）までに必着で事務局あてへ「同封の返信用封筒」で郵送下さるようお願い申し上げます。

団体会員の代表者でご欠席の方

- ・貴団体以外の代議員を代理人とする場合には別紙「委任状」に、
- ・貴団体の役員、会員等を指定して出席者とする場合には別紙「指定書」に、

それぞれ住所、氏名、出席者氏名、団体での地位をご記入、押印の上、平成 27 年 4 月 30 日（木）までに必着で事務局あてへ「同封の返信用封筒」で郵送下さるようお願い申し上げます。

敬具

記

1 日 時 平成 27 年 5 月 27 日（水）16 時 15 分～17 時 15 分

2 場 所 千葉幕張メッセ国際会議場 国際会議室
(〒261-0023 千葉市美浜区中瀬 2-1)

3 目的事項

報告事項

- (1) 平成 26 年度（公益社団法人第 4 期）事業報告の件
- (2) 平成 27 年度（公益社団法人第 5 期）事業計画書及び収支予算書等の件

決議事項

- (1) 第 1 号議案 平成 26 年度（公益社団法人第 4 期）決算承認の件
- (2) 第 2 号議案 役員候補者推薦委員会委員選任の件
- (3) 第 3 号議案 法人運営基本規程第 3 条（団体会員の入会基準）変更の件

4 送付物

- (1) 定時社員総会招集ご通知
- (2) 議案の概要
- (3) 定時社員総会出欠回答書
- (4) 社員総会の代理出席等について
- (5) 委任状
- (6) 指定書
- (7) 日本地球惑星科学連合代議員一覧
- (8) 返信用封筒
- (9) 返信用切手

以上

議案の概要

第1号議案 平成26年度（公益社団法人第4期）決算承認の件

本議案は、平成26年度（公益社団法人第4期）貸借対照表及び損益計算書（正味財産増減計算書）及びこれらの附属明細書並びに財産目録について、監事の監査報告を踏まえて、その承認を求めるものである。

第2号議案 役員候補者推薦委員会委員選任の件

本議案は、平成27年度代議員選挙の結果を受け、平成28年度定時社員総会へ提出する平成28年度役員候補者推薦名簿作成のための委員選任について、その承認を求めるものである。

第3号議案 法人運営基本規程第3条（団体会員の入会基準）変更の件

本議案は、平成26年度第9回理事会第 号議案での承認に基づき、法人運営基本規程第3条（入会基準）（2）に、80名以上の正会員による地球惑星科学に関わる活動実績を有する「日本学術会議協力学術研究団体」に登録された学術研究団体、またはこれに準ずる学術研究団体であることを要件として追加することについて、その承認を求めるものである。

以上

定時社員総会出欠回答書

公益社団法人日本地球惑星科学連合

会長 津田 敏隆 殿

(FAX : 03-6914-2088)

社員氏名

(団体会員代表者の場合、団体名及び代表者名)

平成 27 年度定時社員総会に出席・欠席します (いずれかに○)。

【※ 4 月 30 日 (木) までに御返信願います。】

社員総会の代理出席等について

1 社員総会の代理出席及び議決権行使の委任について

- (1) 代理人の資格代議員たる社員及び団体会員たる社員は、他の代議員たる社員を代理人に定めることができます。
- (2) 代理人は、提出された委任状と照合する方法により、出席資格の確認を受けます。
- (3) 代理人欄が空欄の委任状が提出された場合には、社員総会の議長が選任されたものとみなします。

2 団体会員の出席者の指定について

- (1) 団体会員たる社員は、その団体の役員、会員、社員若しくは使用人を指定して社員総会に出席させることができます。
- (2) 被指定者は、提出された指定書と照合する方法により、出席資格の確認を受けます。

社員総会の代理出席及び議決権行使を委任される場合または出席者の指定をされる場合は同封の委任状・指定書にご記入の上、原本が必要となりますので、4月30日（火）までに、同封の返信用封筒で、当法人事務局へご返送ください。

（送付先）

〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 4 階

FAX：03-6914-2088

公益社団法人日本地球惑星科学連合事務局

委任状

(ご欠席の場合)

平成 年 月 日

住所 _____

委任者 _____ ⑩

私は、次の者を代理人と定め、下記の事項を委任します。

氏名 _____

記

平成 27 年 5 月 27 日に開催される公益社団法人日本地球惑星連合平成 27 年度定時社員総会に出席し、議決権を行使する一切の権限

【※ 4 月 30 日（木）までに御返信願います。】

指定書

(団体会員たる社員の場合)

平成____年____月____日

団体所在地 _____

団体名 _____

代表者名 _____ 代表者印

当団体は、次の者を平成 25 年 5 月 22 日に開催される公益社団法人日本地球惑星科学連
合第 2 回定時社員総会に出席し、議決権を行使する者として指定します。

指定者： _____

当団体における地位： _____

【※ 4 月 30 日（木）までに御返信願います。】

2/9/2015 meeting at AGU HQ (1000-1130)

出席者：Frank Krause, Jennifer Tomb, Fatima Terry, Suyehiro.

主な内容：

- 登録作業はJpGUが引き受ける（現システムの更新が必要）
- 非会員の登録がありうることをAGU側は了解。
- 登録料の50%増はAGU側は了解。
- プログラム委員会は国際になったとき（2016のジョイントセッションから）、委員の旅費はJpGU側負担（最初のAGU提案書のとおり）。これは、100K+20Kのさらに外側のコスト。AGU側の委員長はDenis-Didier Rousseau (2014-2016)。

Action items

- Send the draft joint communiqué to Fatima. （済）
- To finalize the communiqué, it would be good if Presidents' presentations were to be shared beforehand.
- AGU will look at the past WPGM attendance to project for the 2017 meeting.
- JpGU sends AGU information on 2017 JM for web posting.
- JpGU to send 2016 Program Chair's name to AGU Program Chair (~2016). He will have had his experience of "joint sessions" with EGU, after which they can talk to each other.
- Organize timelines and send to AGU.

Points of agreement and discussion:

- JpGU will handle the registration process.
- Multiple currencies will be accepted for registration (USD and JPY).
- AGU does the AGU membership validation. Will require technical coordination.
- AGU prefers to itemize the 100K as royalties, which break down to time of staff efforts for AGU participation and recognition. JM will have AGU-standard (brand cost). The flat fee is meant for minimum cost. JpGU may negotiate with AGU for details such as dealing with risks. This will be between JpGU President and Chris.
- Two payments in 2 JpGU fiscal years are OK if they are within a single AGU fiscal year.
- JpGU reimburses travels of program committee members from AGU in the same way as other JpGU members.
- AGU will select program committee members from global perspective for 2017 JM.
- AGU will select ~4 program committee members regionally from around Japan for 2016 Joint Sessions.

地球可視化技術連絡会の設立に向けて

我が国における地球惑星の観測技術は、これまで、宇宙空間、大気（超高層大気、気象等を含む）、海洋、固体地球、惑星、バイオスフェアの各分野が、各々の目的に特化した形で個別に高度化させてきた。しかし、地球・惑星という共通キーワードを持ちながら、纏まり無く、多数の研究主体によって教育研究が進められてきたため、相乗効果が得られるはずの要素技術が横断的に活用できていない。今後、地球惑星観測技術をより一層発展させるためには、要素技術間において、一方の長所で他方の短所を効果的に相互補完させる仕組みが不可欠である。

本連絡会は、地球惑星科学が持つ多様な研究内容の中で特に技術開発部分に注目し、宇宙空間、大気（超高層大気、気象等を含む）、海洋、固体地球、惑星、バイオスフェアを観測することを最終目的とした最先端かつ革新的技術開発者集団を組織することで、各開発者が目指す観測システムを構成する要素技術を階層的に整理整頓し、知識の体系化（構造化）を進め、それらを組み合わせることで $1+1>2$ の相乗効果を狙い、大型研究企画提案へと結びつけることを目的とする。

本連絡会のもう一つの特徴は研究者集団が地球惑星科学分野と他分野にまたがる境界領域に位置する点である。地球惑星科学は地球及び惑星を理解するために物理学、化学、生物学という他の理学分野のノウハウを総動員する、総合科学的な要素を持っているが、実際、各々の分野との交流は最小限である。サイエンスが持つ創造性という観点からは地球惑星科学分野外の関連分野との交流はきわめて重要で、特に本連絡会が目指す革新的技術開発には他分野との連携が必要不可欠である。分野間にまたがる若い世代の育成は地球惑星科学の教育現場に更なる多様性をもたらし、分野全体の活性化につながると期待する。

・地球可視化技術連絡会運営委員

牛尾知雄（阪大院工） 准教授

村山泰啓（NICT 統合データ開発室）室長

高橋幸弘（北大院理）教授

岩崎晃（東大先端研）教授

井上邦雄（東北大ニュートリノセンタ）教授

中村光廣（名大 基本素粒子研）教授

田中宏幸（東大地震研）教授

・年次行事

MUOGRAPHERS (Muon, Optics, Geoneutrino, Radar, and Photonics for Earth Studies)

2015 年度 行事予定

6 月 9 日 MUOGRAPHERS × Nature 2015

6 月 9 日 運営委員会

6 月 10 日 ワークショップ

・会員（◎は運営委員、参加予定も含む）

北海道大学

◎高橋幸弘

○×

東北大学

◎井上邦雄

白井淳平

三井唯夫

古賀真之

池田晴雄

石徹白晃治

清水格
渡辺寛子
中村健悟
丸藤祐仁
玉江京子
上島考太
白旗豊
高井貴行

情報通信機構

◎村山泰啓

○×

電力中央研究所

木方建造
宮川公雄
末永弘
上田 圭一
鈴木 浩一
窪田健二

千葉大学

竹内延夫

東京大学

◎田中宏幸

◎岩崎晃

竹内希
山野誠
角野浩史
飯塚毅
大湊隆雄
新谷昌人
武多昭道
宮本成悟
西山竜一

草茅太郎

出口雄大

酒井浩考

長原翔五

村田龍馬

駒澤大学

大城道則

電源開発茅ヶ崎研究所

東健一

太田誠二

エムライン浜松

小谷野忍

長崎吉宏

西浦一樹

名古屋大学

◎中村光廣

中野敏行

森島邦博

毛登優貴

西尾晃

三重大学

花里利一

大阪大学

◎牛尾知雄

谷田純

○×

神戸大学

高橋覚

公益社団法人日本地球惑星科学連合
平成 26 年度第 8 回理事会議事録

1. 開催日時 平成 26 年 2 月 19 日（木）
 午前 9 時 30 分から午後 13 時 00 分
2. 開催場所 東京大学理学部 1 号館 7 階 710 号室
 （東京都文区本郷 7-3-1）
3. 出席者 理事数 20 名
 出席理事 15 名 （定足数 11 名 会議成立）
 オブザーバー 5 名
4. 議 長 理事 津田 敏隆
5. 出席役員
 理事 津田 敏隆
 理事 川幡 穂高
 理事 木村 学
 理事 ウォリス サイモン
 理事 奥村 晃史
 理事 北 和之
 理事 高橋 幸弘
 理事 瀧上 豊
 理事 成瀬 元（Skype 出席）
 理事 西 弘嗣
 理事 浜野 洋三
 理事 原田 尚美
 理事 日比谷 紀之
 理事 道林 克禎
 理事 村山 泰啓
 監事 北里 洋
 監事 鈴木 善和
 監事 松浦 充宏
6. 出席オブザーバー

宇宙惑星科学セクションプレジデント 佐々木 晶
大気水圏科学セクションプレジデント 中島 映至
固体地球科学セクションプレジデント 大谷 栄治
地球人間圏セクションバイスプレジデント 春山 成子
プログラム委員長 鈴木 庸平

午前9時00分、理事の定数に足る出席があったので、会長津田敏隆は議長席に着き、理事会が成立することを宣言した。インターネット電話 **skype** を利用し、東京大学理学部1号館と京都大学とで同時に会議に参加できるようにし、審議を確実に行うことができることを互いに確認した。

7. 報告事項

(1) 委員会・セクション活動報告

(1-1) 成瀬 元理事 職務報告 総務委員会活動報告 資料 P. 1

本年度の協賛等について報告があった。前回理事会以降、協賛を許諾したものが5件、後援を承諾したものが1件ある。

(1-2) 川幡 穂高理事 職務報告 ジャーナル編集委員会活動報告 資料 P. 2-4

ジャーナルの状況に関して報告があった。出版論文数が年内目標の25論文(Editorial 除く)に到達した。AGU Fall Meeting にてブースを出展し、連合全体、PEPS、関連学協会および日本における国際学会やプロジェクト、留学生受け入れ状況について情報を発信した。2015年度ジャーナル関連特別シンポジウム、連合大会特別国際セッションの募集を行った。

1月22日に第6回編集長会議を開催した。

(1-3) 浜野 洋三理事 職務報告 大会運営委員会活動報告 資料 P. 5-12

2015年の大会準備状況について報告があった。前日18日に、投稿を締め切った。今後は編成作業へ移る。また2015年大会では千葉市・千葉県教育委員会、千葉市教育委員会の協力により、中学生アウトリーチ企画を準備している。

2016年大会の会場は、幕張メッセ国際展示場に加え、展示ホールとする。2017年大会も同様に幕張メッセ国際展示場と展示ホールでの開催を予定しているが、引き続き検討する。

(1-4) 原田 尚美理事 職務報告 男女共同参画委員会活動報告 資料 P. 13

男女共同参画委員会の活動について報告があった。男女共同参画学協会連絡会の活動について、報告があった。第12回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム(2014年10月東大開催)の報告書がHPに掲載された。2014年11月より新体制が発足した。第13期第

1 回運営委員会に原田委員長と小口副委員長が参加した。

(1-5) 木村理事 職務報告 グローバル戦略委員会活動報告 資料 P.14-19

1 月 20 日に第 5 回委員会を開催した。2015 年大会での 25 周年記念シンポジウムの準備を進めている。

大会期間中に行う International Mixture Luncheon を企画し、準備を進めている。既に参加者の募集を始めた。

(1-6) 成瀬 元理事 職務報告 顕彰委員会活動報告 資料 P. 20-23

顕彰委員会ならびに顕彰関連の活動について報告があった。1 月 13 日に第 1 回フェロー審査委員会を開催した。フェロー審査の過程において審査委員会からフェロー制度規則の再検討についての要望があり、とりまとめた。現在顕彰委員会にて検討中である。引き続き検討するが、公益事業としてふさわしい事業であることを前提として検討する。

(1-7) 固体地球科学セクション報告 (大谷プレジデント) P. 24

固体地球科学セクションの平成 27 年度の活動予定について報告があった。顕彰活動や内部フォーカスグループなどについて活発な活動を予定している。

(2) 日本学術会議の新たな展望を考える有識者会議ヒアリングへの参加報告 (木村副会長)
資料 P. 25

内閣府「日本学術会議の展望に関する検討室」の依頼により、1 月 22 日に「日本学術会議の新たな展望を考える有識者会議」(座長：尾池和夫 (京都造形芸術大学学長)) に木村副会長が出席した。質問に答申し、連合発足の経緯や今後のあり方、学術会議と連合の関係について発言した。

(3) 西田会員との覚書について (津田会長) 資料 P. 26

10 月 31 日西田篤弘会員と寄付金について覚書を交わした。平成 26 年度から 10 年間に亘り毎年金 500 万円ずつ、総額金 5, 000 万円の寄附を受け取る。

(4) その他 村山 泰啓理事 職務報告 情報システム委員会活動報告

その場で村山理事より追加報告の提案があり、全会一致でこれを承認した。

3 月 4 日に日本学術会議主催学術フォーラム「科学を変えるデータジャーナラー科学技術データの共有・再利用の新たなプラットフォーム構築へむけて」が開催される。

8. 審議事項

第 1 号議案 会員（正会員）入会承認の件（成瀬 元理事）資料 P.27-29

定款第 8 条 2 項の会員の入会の定めに従い、新規入会者の入会を承認した。

第 2 号議案 委員会委員承認の件（成瀬 元理事）資料 P. 30

広報普及委員会委員として生形貴男会員，グローバル戦略委員会として，田島文子会員の計 2 名を，それぞれ承認した。

第 3 号議案 国内・外国出張旅費規則改正について（成瀬 元理事）資料 P. 31-34

国内出張旅費規則ならびに外国出張旅費規則について，それぞれ私事旅行を含む出張についての規則および出張中の移動時間の勤務についての規則を加えることを審議した。これを承認した。

第 4 号議案 国内・外国出張旅費規則に関する内規の設置について（成瀬 元理事）資料 P.35-36

国内出張旅費に関する内規ならびに外国出張旅費に関する内規の設置を審議し，これを承認した。

第 5 号議案 日本学術会議・東日本大震災の総合対応に関する学協会連絡会入会の件（高橋 幸弘理事）資料 P.37

日本学術会議・東日本大震災の総合対応に関する学協会連絡会に連合が入会することを審議し，これを承認した。

第 6 号議案 平成 26 年度事業報告書・決算報告書について（成瀬 元理事 北 和之理事）資料別添

平成 26 年度事業報告書ならびに決算報告書について，検討中の案を確認した。現在の案を踏まえて，提出まで総務委員会ならびに財務委員会を中心に検討することとなった。

第 7 号議案 平成 27 年度事業計画書・予算書について（成瀬 元理事 北 和之理事）資料別添

平成 27 年度事業計画書ならびに予算書について，検討中の案について審議した。これを承認した。今後必要となる調整に関しては総務委員会ならびに財務委員会に一任した。

第 8 号議案 第 10 回国際地学オリンピックへの支援について（瀧上 豊理事）

250 万円を上限として，27 年度予算にて支援することとした。第 7 号議案にて提出された平成 27 年度予算書には参入済みである。

第 9 号議案 国際学会への展示出展について (川幡 穂高理事) 資料 P.40-47

2015 年の AGU Fall Meeting での連合のブース出展について議論した。2014 年と同規模の 4 ブースにて出展することとした。JSPS、その他の機関にも連合ブース出展に協力要請をするなど、さらにブースを充実させることを検討することとした。

第 10 号議案 大会における AGU 会員の取り扱いについて (再審議) (浜野 洋三理事)
資料 P.48

平成 26 年度第 7 回理事会での第 7 号議案にて、事実誤認に基づく審議が行われたため、再審議を行った。

当該議案では、「連合と AGU とは MOU を結んでおり、連合の会員は AGU の大会に会員価格で参加できた AGU の会員も連合大会に会員価格で参加できる。しかし現状、AGU の会員は連合会員でなくても、連合大会で発表する際に会員価格が適用されるのに対し、連合の会員が AGU の大会で発表する際には、AGU 会員で無い場合は、非会員価格となる。これを是正し、AGU の会員が連合大会で発表（筆頭著者もしくは筆頭セッションコンビーナ）する際に、会員価格を適用するためには、連合会員である必要がある、という運用とすることを審議し、承認した。」となっている。

しかし実際には、連合は大会での投稿には会員価格を設定していない。したがって、この決議を取り下げることとする。

AGU と連合の不均衡を是正するためには、正しくは AGU の会員が連合大会で発表する際に連合会員であることを要請することとなる。しかし、連合では非会員でも情報を登録することにより、大会会員として投稿発表ができるのが現状である。

以上の現状を踏まえた上で再審議を行った。その結果、現状のまま、連合の会員でない AGU 会員も投稿発表が可能であり、連合の会員でなく AGU の会員でもない者（大会会員）も投稿発表が可能である状態を維持することとなった。

第 11 号議案 事務局の体制について (津田会長)

谷上事務局長の退職に伴い、浜野洋三理事を事務局長代行として雇用することを審議した。これを承認した。

浜野理事から事務局として、役員に以下の要請があった。1.役員等同士の連絡は必要のある場合を除いて事務局を介さず直接やりとりして欲しい。2.事務局からの依頼等のメールに対し、そのメールを受領した旨返事が欲しい。3.事務局が行動を起こせるような指示の仕方が望ましい。

また、5 月の連合大会以降の長期的な体制についても議論が必要であるという意見があった。これに対し会長が今後検討してゆくと答申した。

平成 26 年 2 月 19 日